64-172

64-17

財界名士失敗談 上巻

毎夕新聞社出版部

藏版

明治
42 5 25
内務

例言

一、題して財界名士失敗談といふ、所記成るべく其名に中らんことを期す、成功談に食傷せんとする現代の財界に對し、一服の清涼劑として失敗談を供給するも、亦敢て不可なりとせざるべし。

一、卷中の文字、總て是れ諸名士が、有りの儘をサラケ出せる失敗的實歷談なり、一點一畫、揑造もなければ假託もなし。

一、稿就るの後、多くは各本人の一閲を請ひしと雖も、中には其遑なくして、直ちに印刷工場の手に渡しゝも

のもあり、若し訛謬あらば、編者敢て其責を辭せざるべし。

一、卷中の諸名士に對し、一々小月旦を加へたりしは、一毫褒貶の意ありて然るにあらず、讀者をして諸名士の半面を知るに便ならしめたるのみ。

一、目次の順序は全く順序なきにあらず、併し嚴密なる意義に於て順序と云ふほどの順序なし。

一、財界諸名士雲の如く其れ多し、而して本篇收むる所僅々數十人に過ぎず、蓋し大に餘地を後卷に留めんと欲すればなり。

一、本書を纂輯するに當り、專ら執筆に任じ、時に數名士

を訪ひ、並びに全稿の改刪按排、多くは志賀龍湖氏の力なり、訪問記者立川芳水、清水阿山等、其他數氏者の勞亦少しとせず、特に錄して茲に謝意を表す。

明治己酉孟夏

編者識

目次

澁澤榮一……一頁
高橋是清……一二
添田壽一……一六
中野武營……二〇
大谷嘉兵衞……二九
大倉喜八郎……三四
益田孝……四二
豐川良平……五三
早川千吉郎……五六
雨宮敬次郎……六〇
馬越恭平……七一

高田愼藏……八二
牟田口元學……八五
竹內綱……八八
末延道成……九二
井上角五郎……九四
平沼專藏……九七
佐竹作太郎……一〇一
村井吉兵衞……一〇五
五十嵐敬止……一〇九
鈴木藤三郎……一一二
岩下清周……一一九
岩原謙三……一二二
青木正太郎……一二八

福澤桃介……一三四
早川鐵冶……一四〇
小野金六……一四五
神谷傳兵衞……一四九
大橋新太郎……一五四
梅浦精一……一五七
皆川四郎……一六一
立川勇次郎……一七一
根津嘉一郎……一七六
松澤與七……一八一
賀田金三郎……一八五
宏　虎童……一九一
德田孝平……一九九

濱野茂……二〇三
森岡眞……二〇八
大河内輝剛……二一五
栗生武右衞門……二一八
岩谷松平……二二三
矢島平造……二二八
久米良作……二三四
杉原榮三郎……二三八
松下久治郎……二四四
佐久間福太郎……二四八
大野清敬……二五三
大田黒重五郎……二五七
神戸擧一……二六二

山中清兵衞……二六七
今村繁三……二七三
岩崎清七……二七六
永田仁助……二八一
石井千太郎……二八四
松谷元三郎……二八九
中澤安麓……二九七
西村義之……三〇二
高倉藤平……三〇五
戸田庄吉……三〇八
坂根清一……三一二
大倉良知……三一七
藤井忠兵衞……三二一

目次 終

亀田百太郎……三二五
梅原龜七……三二八
竹原友三郎……三三一
大島甚三……三三四
田中傳次郎……三三八
野村德七……三四四
藪田忠次郎……三四七
中野壽吉……三五〇
多木千吉……三五三

財界名士失敗談 上卷

朝比奈知泉 監輯

男爵 澁澤榮一氏

敢て問ふ、今の財界に一の大將軍を求めんとせば、差當り何人か有資格者なるべき歟、三菱三井二黨は言ふまでもなく財界の豪族にして、安田大倉

藤田住友古河の諸氏は何れも財界の重鎮たるに相違ない、是れ併しながら如何に伎倆と經驗と富力の三拍子揃ひし人なりとて、大將軍たるべき人は單に其れだけでは追付かぬ、況して此の三拍子揃ひし人を發見するさへ容易でない、化粧術に由て美人たらんとする醜婦あるにもせよ、爭ふべからざるものは天稟なり、既に財界の大將軍と謂ふ、是非とも大模大樣、おのづからにして大統率者たるべき氣品氣象を具へ、一挨一拶の間、猶ほ且つ毫も市儈の氣を留めずして、那處となく他の富豪以上に超越する一種の天分なかるべからずと思ふ。

明治財界の大建造者兼大指導者として、社會は一般に澁澤男を推重して居る、倘し男一個の富力を論せば三菱三井の何十分一にしか價せざるべし、然るに多年養ひ來れる大勢力は斷じて該兩族黨の下にあらず、嗟呼偉矣哉と云ふの外はない、殊に男の風貌と云ひ動作と云ひ又其の心術と云ひ、一點下司張た所が無いらしい、敢て壯語せず敢て傲睨せず、而して中實に大統率者たる氣品氣象を具へて居るらしい、扨も男が其の面上に刻める六十年の風霜を飛して其れ將た何等の實歷談を爲すであらうか、男の辭辯や水を趁ふて波を生ずるの趣きあり、請ふらくは目を拭ふて左の失敗談を讀みねかし。

◎一代の羣豪を驅使して天下に號令し、能く得て子孫十三世の基を開きし將軍足利尊氏は果して成功者か否る乎、倘し尊氏を成功者とせば、おのづと楠正成を失敗者と云はねばならぬ、惟ふに尊氏は物質的成功者にして正成は精神的成功者ではあるまいか、世は刈菰と亂れ、人皆義を忘れて利に就くの時に當り、敵甲殘兵を提げて目に餘る足利勢を物ともせず、人間に七生して此賊を滅さんと云へりし烈々たる正成の大精神は、千古猶ほ生るが如きものがある、然らば則ち外形に於ての失敗は必ずしも失敗と申されまい、手段を問はざるの成功こそ寧ろ精神的失敗なるやも知るべからず、何が偖て自己本位の成功談に食傷せんとする今代に於て、失敗談は屹度面白からうと思ふ、ソ

コデ私もお尋ねに任せ、何かお話をすることに致さう。

◎私は攘夷黨よりハイカラ黨に歸化したものゝ一人である、而かもハイカラもハイカラ、幕府時代に於てのハイカラだから一寸可笑しい、今の所謂經濟論とでも云ふべき種類のものは、其當時士太夫の之を口にするを陋しとする所であつた、幕府の能吏小栗上野其人の如きは、此の經濟的智識に富だが爲め、却て四圍の攻撃を受くる一因となつたのだ、然るに私は攘夷論を一擲すると共に、國家的見地よりして何うしても經濟主義の閑却すべからざるを信じ、德川民部太輔に從て歐洲に渡航し居る中、歐洲の新形勢に視て一層深く富國策の急務なるを了解するに至つた。

◎斯くて私は明治元年の十二月に歐洲より歸朝した、此時慶喜公は既に政治上の身代限をして而かも靜岡藩は其際石高拜借と唱ふる太政官札五十三萬兩の藩債の爲、マカリ間違へば併せて財政上の身代限をなさゞるべからざる場合であつた、そこで一たび幕府の祿を食みしことある私は、義として之を默視する譯には行かない、且つ前申した樣な次第で、他の士人よりは經濟趣味に富でも居り、一つ半官半民の商法機關を設け、其發達に伴つて靜岡一藩を健全なる經濟狀態の上に築かうと企てた。

◎其結果、翌明治二年の二月に商法會所なるものを靜岡に設立し、私は今ならば所長囑託とでも云ふべき地位に立ち、御勸定所支配たるべしと云ふ命令の下に着々營業準備に取掛つた、同會所の目的は、第一、米穀に對する常平法を講ずること、第二、肥料の貨附、第三、開墾其他に要する貸金と云ふので專ら預金を吸收するため駿府中の富豪及顔役腕利きの連中十二人を選で用達を命じ、言はゞ官民混淆の組織を以て商法と貸金の兼業をやらうとしたのだ豫算書面では十三年間に藩債五十三萬兩を清償して、更に少くも二百萬兩の利益を贏ち得べき計算に爲て居た、元來藩廳が之れだけの仕事を大した身分でもない私に任して呉れたと云ふのは、其れには一の原因がある、其原因は私が建議者なるを以ての故にあらず、民部大輔に從て巴里滯在中、一時外國

の公債を買入れ、其利子を以て長く民部公子の留學費に充てようとした事もあり、旁々平生より公子に關する一切の費途を明にして精細の計算を遂げ、歸朝の節には鐵砲其他の歸遺を持參して之を差出し、慶喜公の御手許へも幾餘の金額一萬四五千兩を捧げた爲、取れば取り德の德川の末世に、這は又殊勝なりとヒドク藩廳の奇とする所と爲り、コレならば此の仕事をやらしても と云ふ所からして、該商法會所の新事業を全部私に一任さるゝことになつたのだ、時の參政は大久保一翁さんにして勘定所は平岡準藏と云ふ人が之を總裁し、而して平岡其人が最も能く私の言議を容れて呉れたのである。

◎偖ても經營に數ケ月を費し、事業漸く緒に就かんとする同二年の十一月に至り、突然私は朝廷に召出され、租稅正なる官職を帶びざるべからざる事となつた、此の仕官に就ては靜岡の方でも異論があり、私も亦好む所でなし、早速辭意を申述べたが却々聽かれない、而かも大藏一省の全權たる大隈大輔卽ち今の大隈伯に散々說き付られ、今は區々靜岡一藩の事を顧念し居るべき時にあらず、日に中央集權の機會に近づきつゝある場合に於て、須く力を中央政府に致してこそ然るべきである、君も本來は有志家出身にして譜代の幕臣と云ふではなし、此際斷然靜岡邊の小事業を思ひ止り、全國の財政を整頓するとに料簡を改めよと、縱橫に說きまくられて遂に辭意を飜し、其儘留任することになつた、而して靜岡の事業は、誰も私に替て經營の任に膺らうと云ふものもなく自然消滅に歸して先づ失敗の形を留めた譯である、考へて見ればアノ事業は私が長く其局に當たからとて到底成功すべき望みはなかつた、何となれば私の立てた經營案は十三年計畫である、然るに廢藩置縣は翌々年の明治四年に行はれた、して見れば時勢の變遷が何うしても該商法會所の存續を許さない事になる、失敗の運命は如何にしても免れ得なかつたのである

◎其後私は今の伊藤公の手に屬して大藏省の改正掛長と爲り、財政各種の進歩的新計畫に參與したが、續いて今の井上侯、當時の井上大輔を輔佐して大丞より少輔に進み、丁度現今の次官と云ふ樣な立場に居て、伊藤公が亞米利

加の出張先から供給し來る新種を受取り、私が之を調査しては井上侯が之を處斷し、即ち彼の國立銀行條例、公債方案、貨幣制度又一般官制等まで一々調べ上げ、斯くして太政官札の始末も付けようし、舊國債に向て之が整理を試みんとした、這は固より困難なる仕事なりしも、其以前より新政府の誘導によりて成立せし爲替會社其他重もなる彼保護會社が次第に衰殘の光景を呈するには一層當惑せざるを得なかつた。

◎然る所以のものは、當時の商人と云へば、下司根性の商舘番頭か左もなければ固陋極まる舊商人と一種請托主義の儕輩が十の八九を占めて居たが爲めである、是に於て私は以爲らく、官吏側に將來人才の輩出するは幾と疑ひなけれど、所謂蒔かぬ種は生へぬとやら、一方商人側の畑は全く荒れに荒れて居る、之に由て國富を增進せんとするは、木に緣て魚を求むるよりも難からん、諸會社の忽ち衰殘するは大半經營其人を得ざるに由る、是れ實に默過すべからざる惡光景なり、是非野に下て一つ商人の見本に爲て見ようと、ソコで一度ならず兩三度も辭職を內願した、然るに當時は苟も一技一能あるものは皆之を朝廷に羅致せんとしたのであるから、此の內願は許されない、コレハ明治四年頃の事であつた。

◎既にして明治六年、各省と井上さんとが衝突し、各省は大藏省を橫暴なりとして、井上さんが丹精してこしらへた太政官札償還基金七八百萬圓までを使て仕舞へと云ふ勢、左なきだに癇の强い井上さんがいかで默して居るべき赫と爲て火の如くに怒り、直辭職の一段と爲て、扨て私に對し、乃公は辭職するが貴公だけは殘て呉れと云ふお話だ、ソコで又私と井上さんとの激しき押問答となり、言はゞ私は羈旅の臣である、且つ屢々解職を內願したともあれて居る彼の「國家の隆替は固より氣運の然らしむる所と雖も亦未だ政府擧措の當否に由らずんばあらざるなり」云々の建白書を提出し、同年六月井上さんと袂を聯ねて去た。

◎辭職後直ちに私は今の第一銀行組織に取掛り、變則ながら時の大立もの三井小野の兩氏を同時に頭取とし、條例以外の特許を得て私は總監と云ふ名義の下に之を主宰した、然るに取引更に振はず重に銀行の金を使ふものは頭取たる三井小野の兩氏である、監査上の事を依頼し置きし英人シヤンド氏此の有樣を見、コレは銀行でない、自分のものを自分が借る塩みの機關だと云つて、散々小言を食つたことを覺えて居る、斯んな譯合でシヤンド氏には毎々頭を擽された。

◎扨て此れから大失敗の段となる、ソハ案外にも屢々銀行紙幣に大口の引換が起るので結局何うすることも出來ない破目と爲り、愈々八年には銀行を閉鎖せざるべからざる塲合に陷た、若し九年に至り、政府紙幣を以て銀行紙幣を引換へても宜しいと云ふ新法か發布されなんだら、到底活路が無つたのだ該新法は、時の第一銀行に取て宛ら轍鮒の水を得たる想ひがした、併し實を言へば本來の目的に乖戻せる成行きなりしを告白するの外はない、天地の心を知て瓶水の心を識らずとは所謂此事だらうと思ふ、首を回らして試に當年の事を冥想せば、恍として隔世の感がある。

男爵 高橋是清氏

朝廷男爵を高橋是清氏に與へて之を華族に列し給ふ、是破格に似て破格なるも、盖し軍國の大事に際し、外債募集の周旋に成功せる御褒美なりと信ぜらる、男は体格ぶく〳〵と肥滿して見るからに歩行にも重さうなり、殊に下膨れの兩頬は勿論、顔一杯に秩序なき亂髪を生して頭まは之と反對につる〳〵と禿げて居るのが却々の愛嬌だ、羽織の紐に金鎖もてぶら下げた鼻眼鏡を掛けたり疊んだりして、語り出せる失敗談中妙に一種の異彩が閃いて居る、異彩あるも理なり、其れは三分の覇氣を包むに七分の才幹を以てするからだ、男や頗ぶる健啖家の名あり、曾て苦もなく天ぷら蕎麥十杯を平らげしことありと云ふ、今や則ち何如、敢て問ふ〳〵。

◎私をば人か隨分失敗のある男だと云ふさうだが、實は始めから官吏で中頃から今の銀行に這入つたまでの事、財界の失敗は更々ないつもりである、若し社會關係を離れし個人としての失敗を語れば、明治維新の際に學術研究の志を抱いて亞米利加へ渡航し、不幸にして彼方で奴隷に賣られたことがある學術研究が變じて奴隷となつたは大失敗と云ふべしだ、餘り話したくもないことだが、事實だから已むを得ぬ。

◎此外に官吏となつてゐたときの失敗はないでもないが、財界の方面には全く失敗らしいものがない、世間では秘魯の事業を何か私の失敗であるかの如く云ふてゐるが、其れは大間違ゐの話だ、つまり私は發起人などの失敗を運の廻り合せで一切背負つた様なもの、事業其物は外國人に欺かれたでもなく

發起人が株主をだましたでもなし、全く技師田島某に乘せられてアノ始末を見るに至つたのだ、私は其時特許局長を罷めて彼地へ渡航し、始めて發起人の思ふてることゝ大相違あることを發見した、若し私が行かなければ更に大損失を招いたことゝ思ふ。

◎右の如き次第にして、事業の方は私の失敗でなかつたけれども、私一身に取て非常な迷惑を來し少し許り溜めて置いた虎の子もなくなり、多少世間からの信用も害した、そんなこんなで歸つて來ても面白くなし、小石川の棟割長屋で其日暮しの樣な生活をしたのは實につまらなかつた、此事に就ては天知る、地知る、又知る人ぞ知らん、飽くまでも私の失敗だと云ふものあらば言はして置いても差支ないのだ。

◎社交上ではちよい〳〵失敗する、如何したものか私は人の顏と名前が能く覺えられない、二度三度面會した人でも容易に想ひ出すことが出來ないので、隨分可怪なこともある、亦大に氣の毒をすることがある、之には私も困つて

ゐる。

◎明治の初年亞米利加から歸つて故森有禮氏の世話を受け、後ちに日銀の前總裁川田小一郎氏に引立てられ、其後今の地位を得たのであるが、二十六年に時の農商務大臣後藤象次郎氏から、何うかフィラデルフィヤ博覽會の跡仕末をして呉れ、尙ほ將來政府にも人が要る、殊に我省の農商務局山林局は少しも振はんので、追つて君の手腕を煩すつもりだ、先づ差當り博覽會の方をと の勸說を受けたことがある、一面識のない人から斯樣に云はれるのは難有いことだが、此時は秘魯失敗後に屬し、官に仕へるも衣食の爲だと云はれるのが嫌さに、兎角は川田氏に聞合せて下さい、川田さんが好しと云へば仰せに從ひますと云ふて歸た、後で聞けば川田さんも斷たさうだ、元來私は獨立の事業家でないから平生自分を忘れて主人に一身を捧けてゐる、從つて自分一己の主義は有たない、又乾兒を作ることもしない、否乾兒を作ることが出來ないのだ、他人からは其點も失敗らしく見えるか知れない。

添田壽一氏

眉宇の間に顯はれたる一味俊邁の氣は、よく氏が性格の全部を表明す、由來學殖に豊なるもの大抵才に鈍なるは世間普通の狀態なるに反し、氏は學者にして兼ねて才の人なり、而かも其才や決して尋常小才子の才にあらず大才と稱することが假令出來ぬにしても、中才以上の人たるとは爭ふべからざる事實である、惟ふに役人上りにして直ちに重きを實業界に爲したるもの、之を西にしては中橋徳五郎氏あり、之を東にしては添田氏及早川氏等數人あるに過ぎず、彼の松尾臣善さんが日銀總裁にして、氏が興銀の總裁では些と比較が取れない樣にも思ふ、お氣の毒と云はざるべからず、音吐爽朗、秩序整然たる氏の辯說は、政府委員の雄なるものとして、曾て帝國議會に少からざる好評を博した事がある、實を言へば、氏を財界の名士として之を見るの時あるを期待するの情に禁えない、年齒未だ五十に滿たずと聞く、蓋し大なる未來を有するの人なるに庶幾し。

◎事に當て僕は之が失敗だと思つた程の事がない、ダガ折角のお尋ねゆへ、茶番然たる事を一つ二つお話し致さう、昔し曾て僕が大藏大臣秘書官勤務中平河町の官舍に於て、面識のない人に突然訪問され、とにかく會つて見ると仙臺平の袴に斜子の紋付といふ扮裝、田舍の紳士であつて、先生にお願したものがお出來になつて居れば頂戴したいといふのだ、僕は何もお賴みを受けた覺えがないといふと、イヤ貴方でない、先生に賴であるから聞いてくれと

の事、そこで僕が此家の主人である、先生とは一体誰れの事かと聞いて見ると、紳士は驚いた顔をして、貴方が一六先生ですかといふから、それですッかり話しは解つた、此家は元巖谷一六先生の舊宅であつたのだ、門違ひした紳士さんは蒼皇として歸つて行つた。

◎臺灣銀行頭取として暫く臺北に居た事がある、所が土豪臺紳の邀饗には往々閉口頓首せざるを得なかつた、『玉碗盛來琥珀光』彼等は精一杯御馳走の積りであらうが、彼等自ら甜めた匙を以て雜穀を僕の口邊に運んで來る、偖て食ふまいと思つても全然口を噤んで居る譯にも行かない、其れに懲りて內々サンドウイツチを用意して出掛けた事もある。

◎後進の鑑戒と爲るべき事項を話せと云はれても、僕は之に答ふべき適當の好資料を持たない、否々後進の師表たるに足らざる僕の分際を以て、是れ鑑戒也是れ敎訓なりと公言する勇氣がないのだ、併し僕自身が實踐躬行しつゝある處世の第一義は、行住座臥の總てに於て、一に自己の職分に忠實ならんことを期するに在り、忠實の二字は、大にして天下國家、小にして一身一家福利の源泉ではあるまいか、故に僕は公私ともに事細大となく、常に此の心を以て成るべく規則正しく而かも根氣よくやつて行く、一時の成敗利鈍、必ずしも深く問ふ所にあらずだ、今一つは世界の大勢に遠ざからぬ樣、甚大の注意を拂ふことが指を財界に染むるものゝ忘るべからざる必要條件なりと信ずる

中野武營氏

弓馬刀槍の間に人となりし中野氏は身を財界に置いても依然として弓馬刀槍の氣を存して居る、謙抑なる態度中に穩健の思想を含み財界一代の長者として、東京商業會議所、東京株式取引所好個の代表者たり、氏自らは容易に安樂椅子に腰を懸けないと云つて居る、三稅復舊を呼號して重ねて議政壇上に當年の大政客たる俤を留めたのは、宛として馬伏波馬上願賜の概がある、財界の長者にして政界一方の親分を兼ぬるもの、現代蓋し中野氏を推すの外はない。

◎私が若い時分に或る一事に憤慨してそれから非常に忠勤を擢んで、コレなら成功し得らるべしと思ふたことがある、腹立つと云ふとは全体惡るいことであるに相違ないけれど、其腹立ちを若しも善き方に使ひ、善い方の道を取つて行きさへすれば、却て善良な結果を見らるべしと信ずる、試みに其事實談を申しませう。

◎私の舊藩では從前矢張士佐ちやの薩摩だのと云ふやうな藩々で行はれた頑童と云ふことがある、少年の十三四位の子供を捕へて壯年の人が頑童とする、それ故に少し身分ある家の息子が其十二三位になると、同藩中の武藝の達者な顏利に其子供を賴むのである、それで誰某の預り子になつて居ると云ふと其小僧に誰も手を掛けない、所が私は幼少の時こんな人を賴んで置くなどと云ふことをしませんでした、同藩の山本何某と云ふ者でございますが私が七八つの年でありました、或る時私が墓參に行つて寺の門を出ると云ふとそい

つに攫まへられた、兎が驚に出遇ふたやうな調子である、日中のことでありましたが此方へ來いと云ふて引張て行かれた、非常に當惑したけれども對抗する力はなし、恰度二三町行くと私の砲術の師匠の中村と云ふ先生の屋敷の前に出たので早速飛び込んだ、前の山本と云ふ男は眞逆續いて飛び込む譯に行かない、故に幸ひ逃げて終ふたが隨分子供の時分に私は癇癖が強かつたから無念に耐えられぬ、そこで其山本と云ふ男を何とでもして頭の擡らぬやうにやつ附けてやらねばならぬと云ふ怨みを呑んで居た。

◎是から私が大に勉強したのである、劍術槍術馬術小具足、ドレへも凝つて何でも五年ばかりと云ふものは非常に熱心にやつた、もう三年位すると其男が私に敵はぬやうになつて來た、それからが復讐なんである、山本と私は年は大分違ふて居つたけれども、もう私の十五六になつた時分には腕が違つて來たものだから山本は私を見るとソコ〳〵逃げてしまう、其處で其逃げるのを引捕へ、貴樣はいつぞや己れのおかまを所望したな、子供の時分に腕を捻

ぢるやうなことをして己れに恥をかゝしたな、さア來いと何處でも此方がやり得るのだから愉快で堪らない、如上の事情の下に私は小さい時分武藝に精出したのである。

◎最初私は文學の方をやりたい考へであつた、元來私の家は生侍と云ふ武士一方でなくて文官の家柄、父は何んでも御一新頃まで二十年餘り藩の勘定奉行を勤めて居た、故に私も學業を勵んで行政官になるべき筋合なるに拘らず生侍一本槍の武士をやつたと云ふのは、前の山本と云ふ奴に怨を報ひたい、彼奴を閉口させたいと云ふ初一念を貫かんとしたに外ならぬ、之れがまア一つの話なんです。

◎私が商賣上のことに關繫したのは今の株式取引所である、所で私が役人時代から明治十四年に民間へ這入つた其れ以後に於ても、始終奇体であると思ふて居ることがあつた、其れはイツでも人を一人り頭の上に置くのである、即ち何局の次長と云ふまでにはなつて居つてさうして事其務は專ら私が擔當し

ながら役に立たぬ人間を頭に一人り置く、扨て民間に這入つて見ても副頭取とか副社長とか云ふやうなものになつて居るが頭まに社長と云ふものがあつた、株式取引所も肝煎と云ふやうなことで始めましてそれから其後副頭取になつた時分、谷元道之と云ふのが頭取、其後廿一年に始めて關西鐵道會社の社長になつた、そこで段々今日歸往に遡つて考へて見ると、働く人間を一番頭に置くのは危險千萬だと云ふとが判つて來た、切れ味が鈍くならねば他人は安心しない、世の中は妙なものである。

◎明治二十三年迄關西鐵道の社長を勤めた、それで國會が開けて私が議員になつた、所が私が四日市に居らねばならぬのとそれと鐵道は事業中なので、人の財産を預りながら他の仕事をするのも宜しくないと思ひ、國會開設と同時に右の關西鐵道の方を白石直治といふ人にやつて貰ひ、私は東京へ歸つて來た、すると東京で又株式取引所の副頭取に選ばれた、其際電鐵の前身たる馬車鐵道と云ふのがあり、其れが頗る不況の境遇に居り、社長谷元道之、副社長種田誠一の二人が、五十萬圓の資本中五萬圓程株を買潰して居りましたから四十五萬の資本へ持つて行つて十萬圓以上の負債をしたのである、それで今の横濱の平沼が同じ取締役をして居りながら色々な關係上金も貸して居る、言はゞ馬車會社を抵當に取つてあるやうな譯で毎月の收入をば手代を寄越して押へて行く、其他正副社長が銀行からの自分の私債を會社の借りにして居る、之が爲めに會社は非常なる困難に出會はし、それで谷元種田と云ふ者を罪するか罪せぬかと云ふ問題で私は聊か其間に盡力し、牟田口元學の理窟ぽいのを助けて色々やつて見た。

◎ソレから何んでも二十四年頃に豪らい目に逢はされた、彼所の財産差押えが來る、もう運轉を止められやうと云ふ騷ぎ、貧乏な吾々が何うにか金策して一時を凌ぐ位のことをやつたんだが、私は御者の風までして三四年アレを改良するに努力した、元來谷元種田を助けてやらうと思て遣つた仕事だから給料も何も取らず、副社長などゝ云ふ地位にも坐はらず、谷元種田の二人に

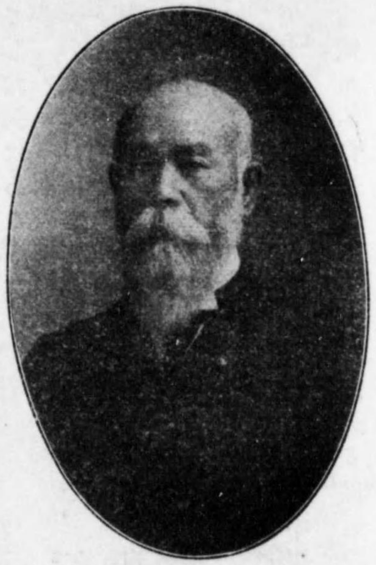
赫い着物も被せず、何うやら斯うやら行る所まで行つて見た、其苦心は却々一と通りの事でなかつた。

◎それから私は國會議員をズッと續けて居た、併し廿七年頃から黨籍は進歩黨でも一々黨議にも從はず自由行動を取て其れでいやなれば除名するが宜いと云ふやうな譯合、其れ以來遂に政黨本部の敷居を跨いたこともなければ懇親會などに出たこともない、伊藤さんから、貴公などは政黨員と云ふて居る拘でないなど云はれたともある、左りとて今政黨の籍を脫せんともしない、其れを脫して豪らい尋常な人間だと云ふ顏をする必要もなかつた。

◎私は又以前政府が北海道の拓殖銀行ぢやとか何とか云ふやうな特別銀行を立てる時分に、お前總裁になつて呉れと言はれたことがある、又それでなくとも民間の銀行と云ふやうなものからは、頻りに要求されたこともある、けれども私は總て保險會社や銀行の重役は決してしないことにしてゐる、それはマア私一己の愚見か知らぬけれども、自分は自分で見識を定めて居る、凡そ物を爲ると云ふことはガラに似合うことより外にすべきものでない、例へば千本櫻の鮨屋の幕でもいがみの權太が立縞の着物を着て來た時分には權太にならぬ、矢張り大きな碁盤になつて居る辨慶縞のやうな着物を被て來ぬと云ふと權太と誰も見ない、中野武營と云ふものは金を人に貸すとか貸した金を取立てるとか云ふやうなことは少しもがらに似合はぬことである、恰度私が銀行屋をすればいがみの權太が立縞の着物を被たと云ふことになる、故に斷じて之を辭して居る。

◎又二つには工業と云ふものが私の力には及ばぬと觀念して居る、工業が發展せねば日本の國力の增進が出來ないのであつて、どうしても之を進めねばならぬと心は用ゐて居れど、自分の力で出來るか出來ないかと判斷して見ると何うしても出來ない、それだから製造業と云ふものには私は一つも關係しない、それは何う云ふ理窟かと云ふと、自分の理窟はこいつは原料を買う智惠がなければならぬ、職工を澤山使はねばならぬ、又賣ると云ふことが出來

なくてはならぬ、販賣には競爭者と云ふものが出來る、從つて種々の手段を執て之と戰はねばならぬ、ソンな悧巧げなとは私には出來ない、やつたら屹度失敗すると思ふ。



大谷嘉兵衛氏

橫濱の商圍と紳士圍とを代表する同氏は、六十六歳の高齡にも拘らず、猶且つ日に京濱間を來往して一意對外貿易の發展に力め、而も業務の餘、或は歐米及淸國の商工業を視察し、或は東京橫濱の商業會議所を代表して米國費府の萬國商業家大會に臨席せるなど、勞や功や洵に多とするに足るべしだ。

合衆國官民に太平洋直通電信の布設を求め、之が急施を見るに至りしは氏

の大なる働きと云ふべきであらう、勳三等を貰たのも蓋し故なきにあらず氏や廣額禿頭、疎々たる白髯と相映帶して坐ろに書中の老仙を見るの想がある、商才よりも寧ろ商德に富める人物として一般財界に少からざる崇敬を拂はれて居る。

◎自分は十九歳のときに故郷和歌山を立出て、横濱に四十七年在住して居る幸ひ其間に失敗と云ふほどの事はない、併し若い時分の血氣にまかせて失敗せんとした例はある。

◎自分の父母は極めて慈悲に富だ人で、乞食、旅僧などの類が來ると必ず一飯の施しをした、其れ位であるから父母自身は勿論其子弟にも一切殺生を禁じてあつた、從つて自分は幼少の時から今日に至るも介蟲をすら殺生した事がない。

◎所が十一歳位の時と思ふ、弓の稽古中誤つて雀を傷けた事がある、常に兩親から戒められてあるのに、過失とは云ひながら、其れを侵したのだから深く自ら恐懼して急ぎ唐辛水を造り、雀の傷を洗滌して飛ばしてやつた事がある、此事は今に於ても忘れぬ。

◎横濱に來て以來、毎年必ず一度は故郷に歸つて父母の安否を問ふた、今でこそ和歌山位何でもないが、維新前東海道の往復は隨分難義なものであつた、元吉と光吉といふ二人の男を連れて居た、此二人は國許の家僕で其一人は現今でも自分の家に居る、今年七十四歳だらうと思ふ、所で其二人を召連れて箱根の番所を越えたが、駕籠屋が頻りと轎に乘れと云つて勸める、此等は油斷のならない雲助だから、自分は務めて之を避けんとした、然るにどうしても道を遮つて歩行せない、年は若し、腰には日本刀の所謂鐵斷つべしと云ふのがある、ソコデ餘りの無禮に乘らんといふたら乘らん、べらぼうめと言ふと、彼等は素より斯くあるべしと期待して居たのだから、べらぼうとは何だと力杖を以て前後から打ち込んで來た若し此處で刀を扱いたら萬事休すであつた。

◎此場合に平常兩親から訓戒されて居た殺生禁の觀念が油然として腦中に起り、斷じて斫てはならぬと思たので、前後とも引外して置いて當身を喰はしたら、彼等兩人とも地上にヘタ張てしまつた、勿論死だのではない。

◎所へ何處かの大名が下に！下に！とやつて來たのを幸ひ、賽の河原迄行つて始めて連れて來た家僕に逢ひ、其所からブラ〳〵行くと、間もなく先きの二人の雲助が追て來た、今度は復讐に何事を仕かけるであらうと思つて居ると、彼等の曰く、ごうも貴郎の度胸には驚いた、今度は抵抗せんから畑宿まで荷物だけ持たしてくれと温しく出て來た、其晩小田原に泊て合宿の人に其話をすると、一人殘らず駕籠屋の難に遭つて居らぬものはなかつた、今になつて考へて見ると、とにかく無事に濟みは濟だものゝ甚だ危險な狀態にあつたのだ血氣の勢に任せて若し斫りでもしたもんなら、今日斯う無事で居たか何うかは聊か疑問である。

◎彼等駕籠屋輩が如何に無禮な動作に出でたにしてもべらぼうめなどゝいふ言辭を愼だならば、彼等に好辭拂を與へる事もなかつたのだ、先きから如何に求められたにしても、自ら應じさへしなければ詰り喧嘩にならない、要するに短氣は損氣、吳々も戒心すべき事と思ふ。

大倉喜八郎氏

今更事新しく氏の奮闘史を說かざるべし、五六十年來繼續せる驚くべき氏の精力主義は、天下復た一人の之を知らざるもの無ければ也。

葵町の高臺に三層の樓閣を築き、居ながら東京全市の四分一を下瞰すべき最好位地に在りて　鐵の如き体軀を安樂椅子に横へ、煙草を燻らしつゝ悠然と構えて居るのは、誰れあらう大倉氏其人なり、悠然と云つても漫然暢氣に隱居樣を極め込むにあらず、依然たる舊精力は老ゐて衰へず、其富力活力及び動力は、相變らず財界の一大槓杆と稱されて居る、而かも多趣味なる同氏は、乃ち時世の要求に應じて獨力商業學校を創立し、國寶保存の趣意を以て、宏大の美術館を建造するなど、尋常の道樂と大に選を異にするものがある、若し夫れ狂歌と越中節とは蓋し内所の道樂とも云ふべき歟高齡七十三、而かも頭髮漆の如く、鬢上曾て一莖の白を點せず、して見れば生理的に於ても亦おのづと常人と違つた所があるらしい、其飾らざる態度を以て語り出せる失敗談なるもの、大凡下文の如し。

◎天下由來爲すべきの事多し、又爲し得らるべき時宜機會も決して乏しくない、快事業好機會はイツも必ず活世界の表面に横はり、イツも必ず現社會の表面に動いて居る、然るに凡夫の哀しさ、兎角眼前咫尺の外を洞觀すること能はずして、徒に盲目探しをするのが實に情けない、而して矢張り自分等も此の凡夫仲間の一人かと思ひ、往々浩歎深慨に禁えざる事がある、頭を廻らして多くは昨日の愚を笑ふ、先見の明と云ふのが却々六つかしい、唯だ自分は

六十年來有ゆる人海の險波と奮闘して此の一身を鍛ひ上げたと云ふの外、別に大に語るべきものも無い、金持になるのが即ち成功だとも信じて居ない、話せと云はるゝ失敗の實歴に付ては、差當り二つ斗り思ひ浮んだ事がある。

◎自分は明治五年から六年にかけての歐羅巴巡遊中、佛國巴里にて木戸參議中井弘三何禮之助等諸氏の一行に會し、外に一人の米人を加へて自分と共に都合五人の同勢にて、墺都維納の博覽會見物に出掛べく相談取極り、途中伊太利のボンベイに立寄り、昔し曾て全市地底に埋沒せし前代の遺跡を吊し並びに其遺物を縱覽した、其時一行何れも中井さんに散々吹飛ばされたが、中弁さんは、持前の例の調子で嘲罵百出と云ふ有樣、曰く僕は歐羅巴の旅鴉である、卿等赤毛布連とは大に趣を異にする、僕には歷史眼があるから前代の事を諳じて居ると云つた樣な譯合で、道の木戸さんも少からず毒氣に中てられ私しなどは大に閉口させられた。

◎此の吹飛ばされはホテルでの午餐中の事であつたが、其中に停車場の鈴聲一番、サア滊車が出る、乘り晩れては大變と云ふので、周章しく停車場に驅け付けた、獨り中井さんは面憎いほど悠々としてやつて來る、所で滊車が徐々と搖き出した一刹那、ホテルのボーイが驅け出して來て車窓外から中井さんを見付て、テーブルの上に金貨を置わすれた人は多分おまいかたの連中だらふと支配人から云付つたといふてその金を中井さんに渡した、そして幾許か呉ろといふあんばいに手を出して居た、間髪をいれぬ間に滊車は走り出した、ボーイは失望する、忘れたぬしの中井さんは今度アベコベに此方から揶揄はれる、ソレで旅鴉の直打も判つた、ポンベイの財布の話を長く記臆して置かうよなどゝ木戸さんが斫り込む、其れで漸つと中井さんに對する復讐は出來たが、扨て右の一行と維納で博覽會を見て爰で手を分ち、自分一人と爲てから途轍もない大失策をやらかした。

◎其失策と云ふのは、巴理のグランドホテルに宿して翌日はロンドンへかへるといふので日本公使館宛に打電した電信一件である、其電信は字書を拾ひ

讀みして其れで綴りを合せ、マアヽ大丈夫と信じて居た、然るに倫敦に着くと公使館の鈴木金藏と云ふ書記官が停車場に來て居て呉た、やあーしばらくといふて握手すると劈頭第一、アノ電信のぬしは君か、君は飛んでもないことを云つて寄越したものだ、「明日巴里が倫敦に行くから停車場へ公使に出て來い」と云ふ電文だつたと言はれて、其れには面目玉を踏潰し、覺ず冷汗が流れた◎當時の駐英公使寺島さんが、我々も始めて蘭書を讀んだ時には往々之と類似の頓珍漢をやつたものだ、有り得べき間違ゐゆへ、氣にかけるに及ばないと慰めて呉れられたが、巴里が倫敦に行くから公使に出て來いなんて、尋常の滑稽沙汰ではない、若し商業上の電文に斯樣の誤電があつたとすれば、其れこそ大變である、自分の建設した大倉商業學校の科程中、英文英語に最も重きを措て居るのは、勿論時世の要求とは云ひながら、一は自分の赤面した覆轍に幾分は顧みたのである。

◎明治十年、朝鮮政府から我が政府に對して饑饉の救濟を求め、然るべき商

人に命じ、至急廻米して貰ひたいと云ふ切なる依頼があつた、然るに其際には彼の西南戰役を引受け、國內鼎沸の有樣、政府者一人として朝鮮の事なんかを顧みるものなかりしに拘らず、故大久保內務卿のみが堅く救濟說を主張し、內亂の故を以て隣邦の急を救はざるは義にあらずと爲し、閣議茲に決して私に廻米の內命が下り、直ちに米の用意をして釜山に持つて行けと云ふ一段になつた、是に於て私は大久保內務卿に謁し、米は何時でも運びませうが扱て船と云ふ船は盡く軍事上の御用船に屬し、到底策の施すべきなし、何うしたら宜しかるべきや、船さへあれば廻米は譯もない事であると御引受を致した、此時遖の大久保さんも多少沈思の体なりしが、其翌朝に至り、御用船中より瓊浦丸を扱いて神戶へ廻はすに由て早速開帆の準備に取掛るべしとの事であつた、此時にツク〳〵私は大久保さんは豪い勢力の人だと思つた、而して此の朝鮮行が、私に取て九死一生の大厄、意外の奇難に遭遇した一場の物語りがある。

◎既に貴公に一任した以上は、別に官吏を上は乗りさせるに及ぼないと云ふので、神戸出帆後の事は一切私一個の責任と爲り、幸ひ首尾克く釜山に揚陸して荷役の濟むと同時に瓊浦丸をば急いで神戸に還へした、扨て受渡も濟んだ一週間滯在しても二週間滯在しても今度は乘つて歸るべき船がない、而かも國内の事情に顧み、戰地到る處に手を擴げてある故、歸心矢の如しである、ソコデ無據一艘のイカ釣船を雇ひ、屈強の舟夫五人を載せて博多へ乘り付けべく眞一文字に釜山を乘り出した、所が最初油の如く靜かなりし海上は、翌日夕方より忽ち荒れて山なす怒濤と爲り、一面に墨を流した樣な雲が飛んで行くかと思ふと、驀地に暴風が吹いて來た、長さ四間半に巾一間斗りのイカ釣船だから堪らない、今にも木つ葉微塵と摧けて看す〳〵此身は鮫魚の腹中に葬らるゝの外なき悲慘の運命に陷るであらうと思へば、智慧も分別も出る譯のものでない、又出した智力を施すべき途もない、はや絶体絶命、爰で舟子どもに意見を聞くと、此舟の破れぬ内はたとひてんぷくしても我々はもとの通りに引くり返すから旦那は舟をはなれてはならぬと云ひ、私は水れんをしらぬといふとそれなら舟をはなれぬやう繩でくゝれといふので身体を船へ括り付けられた儘波のまに〳〵丸る二晝夜を暮らし、三日目の曉き、一髪の山影を認めた時の嬉しさ、ソコは對洲の神崎の鼻と稱する所であつた。

◎漸つと命ち拾ひをして其れから嚴原に行き、今でも記臆して居るが佐伯嘉十と云へる問屋の許へ着いた、其時嚴原も大荒れ續きであつた、苟も爲すあらんとするの志を懷くものは、決して無謀に危險を冒すべきものではない、匹夫の勇に驅られ、三十四十で死んでは事業らしい事業の出來よう筈なし、當年の事を回想する毎に、今でも私は慄然として膚に粟を生ずる思ひがする

益田孝氏

明治の大富豪三井一家の榮枯は、一半以上益田氏の責任に屬して居る、從つて三井が大を爲すだけ其れだけ益田氏も大を爲す道理なり、是に於て氏は三井の大宰相たると共に、一般財界の宿老席を兼有す、若し或る意味より之を言へば、三井の益田氏にあらずして益田氏の三井なるやも知るべからずである。

三井物産が覇を支那貿易に稱し、進んで猿臂を歐洲に延ばすに至れる迄の大苦心は、門外漢の容易に想像し能ふ所でない、親しく氏の口頭より其間の消息を聽くを得ざりしは、窃に遺憾とする所である、併し異れる方面に於ける氏の失敗談中、最と面白き節あり、乃ち左に其數節を撮錄せん。

◎今でこそ西洋の事物を能く消化して適當に之を我國に應用することを知つて居れど、舊とは西洋の事情を生知りであつたが爲め、鴉が鵜の眞似をしたことでも云はうか、其失敗中往々抱腹絶倒の事がある、併し其所謂失敗中、自分一個に係るものは幾ら御話しても宜しい、人から引受けて居つた事業に關する失敗に付ては、事業を引受けさせて呉れた人に萬一差障りを起しては相濟まぬ譯であるから、折角の御要求でも先づ此方は差控えて置かねばならぬ

◎自分は病身であるから迚も十分に世間の事業に力を盡すことは出來ぬ、寧ろ隱居して靜かに農業でもやつて見た方が得策であらうと云ふ考を起した事がある、併し農業と云つても普通の農夫のやうな眞似をすることは出來ぬ、自分が少しく西洋の書物を讀んで居つたのを幸ひ、先づ日本農業上の缺點を

數へて見ると、第一家畜を飼養して農作の用に供し、同時に地味を肥し且つ食用に供すると云ふ農業上の一大利用を全く打捨てゝある、さうして一般の食物は唯米と魚の二者あるのみ、是れでは我國人の健康が西洋人に及ばざる筈である、又我國農業上の收穫と西洋に於ける農業の收穫とを對照して著しい相違のあるのは、畢竟農業の主要物たる家畜飼養上の關係に原因すべしと信じ、是非此種の事業を日本に開かんとする理想の下に不慣な百姓をやつて見ようとした。

◎其頃は極く田舍であつた品川御殿山の今住居して居る土地を買つて、此處で米國の所謂「ドメスチック、ホルチカルチューア」を始めた、作物は「キャベージ」や「ラディッシュ」其他の西洋野菜であつた、米國出來の書物を見ると是等の野菜に關する精細の計算勘定が載つて居る、而して又都市の近傍で是等の野菜を作るのは大いに利益あると云ふことも書いてある、そこで自分と同じ考を持つて手方になつて働かうと云ふ書生をして先づ之を作らした、何やら作らうと思たゞけの物は出來た、そこで「マーケット」を日本橋あたりの青物市場に賣ると云ふので「キャベージ」を車に載せて例の書生が輓いて行つて青物問屋に賣つて來た、書生が歸つて來たからどうしたかと思つて窃と部屋に行つて覗いて見ると、書生先生部屋の中で何やら錢を勘に貫したのを一連前に置いて洋燈の下に胡座を組んで頻りに錢を睨で居る、外から聲を掛けて何をして居るかと聞いて見ると書生先生長歎息を洩らして、春の彼岸の明けに種子を播いて秋になるまで粒々辛苦をして作つた結果が今私の前に在る一連の錢に換つたに過ぎない、偖々豫想とは大變な違ひで「キャベージ」などは今市場に持つて行きましても實は食ふ人は稀れなんですから買つて呉れ手がありませぬ漸くのこと賴んで賣つて來ましたのが此錢ですから、もう迚も西洋野菜などを作つた所で錢にも何にもなるものではない實に馬鹿な事をしたものであると云ふ、考へて見ると「キャベージ」は西洋料理にこそ使ふが外には餘り使途がない、如何にも賣れない道理である、段々聞いて見ると、其當時故後藤伯が

西洋通の話を聞いて高輪の邸内に西洋野菜を澤山作らせた結果、始末が着かなくなつて市場へ捨てにやつたと云ふ話もあつた、世には同一轍の事もあるものだ、元來野菜を作るにしても、日本人の常食物を作らざるべからざる筈なのに、其點に就て十分の注意を拂はざりしは慥に失敗と自認せざるを得ない、然るに常食物を作るにしても、其れは普通の百姓が作つて居る、百姓と同じ事をするのは自分の如き素人の到底能くする所でない、是に於て米國の書物をば遂に地上に一擲した。

◎野菜に失敗しても牧畜事業に成功すべき望みがあり、先づ自分の家に牛を飼つて然る上で牛に付ての實驗を積まうと思ひ、其際今の澁澤男爵にも相談して見た、以爲へらく牛を畜へば牛は「ミルク」を出す、それを賣捌いて牛の改良を圖り、犢が產まれゝば其れが大の利益になる、之れに附隨しては肥料を造り且つ土地が肥える、是れだけの利益があるからと云ふので、牛を四五頭自分の屋敷內に飼た、所が家族が大の不承知、臭くて仕方がない繩がたかるなど、言つて頗る喧しい、それを抑えてそんな馬鹿を言ふものではない、牛を飼へば斯う云ふ利益があると云つて頻りに說得した、本來日本の牛は十分に成長した所で肉は四百封度しか取れない、それが西洋種の牛は千封度から取れる、牛乳も日本の牛は一日に二升しか取れぬが、西洋種の牛は上の物は一斗は取れると云ふやうな講釋をして段々飼育して見た所が、不慣な事はどうしても仕方がないもので到頭胎まない牝牛が出來てしまつた、素破らしい金を出して買つた牝牛がどうしても男嫌ひで幾ら交尾させやうと思つても交尾しない、從つて犢も出來なければ乳も出ない、斯う云ふ譯で牛一二頭損をして人に遣つてしまつた。

◎「ミルク」の方はどうであるかと云ふと「ミルク」は成程賣つて歩けば賣れぬことはない、併し之を賣らうと云ふには朝三時に起きて乳を搾つて五時にはずつと人の家に配達をしなければならぬ、所が夜中から起きて乳を搾つて「ブリッキ」の罐を清淨に洗つて之れに乳を詰める、罐を洗ふ時の騷しさと云つたら非

常な者で家中の者が眠られるものでない、固より家に温かに寝て居て富を得られる筈がないから夜中からでも起きて働かなければならぬと言ふは言ふもの丶、専門に一日二石も三石も賣つたら卒ざ知らず、米國の書物に依ると米國では一合五仙位に賣つて居るが日本では五錢に賣らうと云つても買手がないから三錢位に賣るのが精々である、米國の五仙は我が十錢に當る、それを三錢に賣るのだから迚も引合はない、徐つた牛乳は「バタ」に造らうと思ふが「バタ」は臭いと云つて其の時分一般には使はない「コンデンスミルク」を造ると云ふことになれば是れが又中々の損失である、そこで牛乳を賣ると云ふことも自宅で片手間にやるのは可かぬと云ふことに極つた。

◎然らば牛肉の方はどうかと云ふと日本の牛は四百斤しか肉が附かぬ、さうして其頃一斤の直段が二十五錢位、米國種若くは雜種の肉は一斤八錢、其頃麥も安かつたには違ひないが、麥などを食はして飼つた牛が一斤八錢では縱しんば千斤の肉が附いた所が一頭八十圓にしかならない、是では迚も引合ふものではない馬鹿氣た話だ、それでは味はどうかと云つて聞くと西洋種の牛の肉はまづくて迚も食へぬと云ふ話、そこで是はまづくても安ければ宜いと云ふ人達に賣るより外はない、上流の人は好んで日本種の肉を食ふがそれはどう云ふ譯かと云ふと、日本の牛肉は甘味に富んで居ると云ふのである、それでは日本の牛を飼たらどうかと云ふと四百斤しか肉が附かぬから、是れ以て引合はぬと云ふことになる、尙段々研究を重ねて見ると、米國あたりでは同じ片手間でも非常に大仕掛にやつて且つ需用も大きいから、それで捌けて引合ふことになるのであるが、需用のない日本に西洋の物を直ぐに持込んで來ても忽ち失敗に歸すると云ふことが分た、そこで結局自分は少し其の事業に付ての智識を得たと云ふに過ぎないことになつて、早速喧しい家族の小言を鎭靜する爲に牛を賣て仕舞た。

◎斯樣な譯で「ドメスチツク、ホルチカルチユーア」は失敗に歸したが、併し純粹の牧畜と云ふことは好い事業である、之を是非日本に起さんとして、好牧

場を東京近傍の野州上州武州等に求め、後ち函根に遊んで今の宮城野から先きに仙石原と云ふ縦二里餘もある千町歩以上の原野あるを見た時には實に喜びに堪えなかつた、土地の者に聞いて見ると仙石原には何もしてないと云ふそこで其處に生えた草や土質などを吟味し、歸京後澁澤君の所に行つて、偖今度素破らしい牧場地を見出した、彼の仙石原こそ東京にも近し且つは湖水があつて牛馬の放牧に最屈強地なりと云つて相談に及んだ所が、澁澤君も大に同意を表して呉れたので、愈よ其千町歩の地面を買ひ、澁澤君始め二三の友人で相當の資本を出し合つて事業を始めた。

◎原野も焼けば良い草が生へる、又牧草も蒔けば出來る、と云ふので二里ばかりの間に柵を築き、馬は南部から買つて來る、牛は和蘭の「ホルシチン」と云ふのを取寄せ、横濱近所で雜種を買つたりなどして、馬七八十頭、牛八九十頭も牧場に入れることになつた、勿論我々は商業に從事して居ることであるから、自分で直接此の牧畜事業に從事したのではない、人を傭入れて我々同志の理想通りのことをやらして見たのであつた、然るに大間違なことを發見したのは仙石原の土質は函根の火山灰であつてたが、之れに牧草を育てやうとして見てもどうしても出來ない、馬に二三年踏ませて見ると茅すら小さくなつて草も段々生へなくなつた、それに牧草と違つて養分が少いから冬は態々三島若くは小田原あたりから麥を買つて來て飼ふと云ふやうな譯で、米國の書物にあつた豫算通りには行かず、ナカ〳〵高いものになり、其後十數年丹精をして見たが終に失敗に了た。

◎そこで又可笑しい事のあつたのは、耕牧舍と稱へた仙石原の牧場の牛乳店を小田原と東京の新宿近傍に開いた、彼の近所の百姓が牛の肥料を無論喜んで幾らかに買て行くであらう、此の肥料とても幾らか金になると思ひきや、百姓は人糞をこそ良好なる肥料として四方八方遠きを厭はず持つて行くが牛糞はドウ云ふものか効力がないと云て誰も無代でも取て行て呉れるものがない、到頭地所も相當に廣くはあつたが、牛糞の始末が附かないことになつて

已むを得ず金を出して他へ運んで貰ふと云ふことになつた、金になると思たものが結局金を取られることになつてしまつた、今だた自分達には分らないのであるが學者に聞いて見ると牛糞は効力も少く且つ溶解するのに手間が掛ると云つて全然仕方がないものにして居る、蒙古では牛糞を壁に塗ると云ふことを聞いて居るが、我々も前述ぶるやうに始末に困つたことがある、斯う云ふ工合に考が足りなくて牧畜事業は失敗に歸した、併し其始末を附けて見ると各自が支出した金より餘分になつて戻て來た、是れは牛乳店を開く爲に新宿其他に地面を買た其の價格が騰貴した結果であつた、偖仙石原はと云ふと今日でも依然たる舊の原野で何の役にも立たず、松吹く風に空しく我々が當年の失敗の事蹟を留めて居る。

豊川良平氏

氏は三菱の大黒柱にして同時に明治財界の怪傑と稱せらる、苟も三菱の勢力の及ぶ所、其一半は亦從つて氏の勢力圏内たる觀がある、殊に驚くべきは氏の酒力なり、殆ご朝夕呑み續けと云ふ有樣、銀行に出ても常に熟柿臭き香をプン〳〵さして要領を得た樣な得ない樣なことを洒々乎として囓舌つて居る、聞くが如くんば、氏は豊臣秀吉徳川家康張良陳平の各一字を取て豊川良平なる新姓名を作成したる由なり、果して然るや否や、体軀は豚

の如く目は象の如し、而かも其れが胡麻鹽頭を打振〳〵物語る所は如何にも奇と云ふの外はない、年齡はと問へば年を云ふのは昔しから大嫌ひだと逃げる、低からざる一種の氣度天分を具ふるが蓋し氏の長所ならん、財界の豪者と呼ばるゝよりも、酒中の神仙と云はるゝが或は本懷なるやも知るべからず、聞けば極く最近に酒を禁したと云ふ話もある。

◎何が拙者の失敗かと云へば、獨自一己の經營を爲さずして、長く三菱の番頭さんで暮したことが第一の失敗なりと公言する外はない、拙者の友人中には大將になつたものもあれば大臣になつたものもある、又各自に自家の事業を成就したものも少くない、然るに拙者は一生涯番頭さんで終んとするのだ

◎見込違ひが若し失敗ならば、其れこそ悉く失敗ならざるなしだ、戰前のことは戰後から見れば見込違ひ、昨年の事は今年になれば全くの見込違ひ、昨是今非、結局見込違で押し通してゐる。

◎拙者は主義とか定見とか云ふ理想的のものを更に有たない、番頭にそんな立派なものゝある道理がない、身を處する方針すら立つてゐないのだもの。

早川千吉郎氏

農民の指導者たらんとする初志を以て農政學に指を染めたる同氏は、一轉して大藏省の官吏と爲り、再轉して三井銀行主宰者と爲り、一面には禪坊主の弟子と爲て坐禪の眞似をするかと思へば、阿嬌を重簾淺夢の底に鎖し て暗に艷福に誇て居る、斯くも多樣多趣、各方面に發達せる能力往くとして可ならざるなし、才の敏なる扨ても驚き入るの外はない。ドコを叩いても微塵蠻氣のないのは氏の特長であるかも知れない、金澤出

身者の變り種にして而かも財界一と粒選りの新人物と推稱されて居る。

◎吾輩は物質上の成功を斷じて成功と認めない、故に物質的失敗もまた失敗と思はぬ、物質上の成功者としては世間其人少からずと雖も、精神上の成功者は果して幾人あるべきか。

◎其時代に於て滿足の境遇にありしや否やは姑く別論として、大聖釋迦、孔子、基督の如きは精神的成功者なること言ふを俟たず、吾國に於ても平重盛の如きは、種々の議論もあらうが吾輩は精神的成功者たるを疑はない。

◎失敗といひ成功といふも、要は唯精神の慰安を得ると得ざるとにあり、巨億の富を積むも更に安心立命の出來ない人は決して成功者とは云はれない。

◎誰れでも言ふとだが、處世の必要條件は何うしても誠實の二字であらうと思ふ、此の二字は洵に古るい字句であるが、併し意義に至つては萬古尙ほ新なり、自己の良心を欺いて居る不誠實者をも、單に物質上より見て成功者と稱するならば、天下寧ろ失敗者に由て充たされんことを望むの外ない。

◎現在従事しつゝある銀行業は吾輩本來の目的にあらざるがゆへ、此點に於て吾輩自身も本心を欺いて居る樣なもの、吾輩本來の目的は農民の指導者たらんとするに在つたのだ、帝國大學卒業後大學院で農政學を專攻したのも其れが爲めである、而して小農家に對する信用的金融機關の設備と云ふことが、先づ第一に吾輩の爲さんとする企望であつた。

◎當時の大學總長は渡邊洪基先生であつて、吾輩の志望は先生の理想と近かつた所からして、大に先生の贊成を受け、先生と吾輩とで一つ全國を行脚して見やうと思ひ立つた事もある。

◎然るに其際大藏省で、農工銀行、勸業銀行、興業銀行等創設のため、吾輩を登用すると云ふので遂に大藏省に這入る事になつた、畢竟其れは吾輩本來の志望たる農政機關を完成せんとする目的の幾分を達し得らるべしと信じたからである。

◎其後種々の事情に制せられて商業機關たる三井銀行の人となつた、之が即ち吾輩本來の目的に副はぬ仕事である、故に此點に於て吾輩は精神的失敗者と云はれるかも知れない、然し今後の吾輩は此儘銀行家として終るか、將た本來の志望に立戻るか、ソハ未來の問題に屬し、今から屹度斯うだと云ふ事は出來ない。

◎事初志に背いても、併し事に當て吾輩は決して誠實を缺かない、卽ち現に三井銀行の爲め、眞面目に之が隆昌を圖つて居る、勝てば成功負くれば失敗財界の眞劍勝負は却々油斷が出來ぬ、誠意を缺ける事業家は、眞劍勝負の時に傍き眼をして居る樣なものである。

◎商業道德に缺如するは我が財界の一大恥辱であるまいか、如何に利己主義の世の中でも、政府の役人は自己を中心として利益を圖るものが少ない、民間になると兎角利益一點張りなるが故に、其腐氣汚氣は自然空氣を昏濁する、又我國人は事業に就て深き趣味を有たない、從つて熱心の度が低い、是れ吾輩の常に長吁短歎する所にして、ソコに失敗の原因があると思ふ。

雨宮敬次郎氏

兎も角天下に一種の雨敬主義を唱へて其旗頭となりし人なり、遣り口はイツも大ザッパで、イザとなると天風一過して萬籟吹ゆるの概がある、元來相場で仕上げた腕前ゆへ、何でも一擧して遣付ける癖のあるのも無理がない、事業の創設に長じて維持經營の才が存外鈍いかも知れぬ、氏は常に斯う云ふて居る、曰く、田舍で橋を架けるには知事も郡長も土地の有志も出て來て落成式を擧るが、扨て竣工後に渡り賃を取るのは婆さんか爺さんで澤山だ、又こんな人間より外に橋賃を取る爲に座り込んでゐることは出來ないのだと、然り氏は全く架橋の人で橋賃を取る人ではない、故に事業を目論でも滅多重役などにはならない、世の中の奴等金がない〳〵と愚痴斗りコボして居やがる、碌な働きもせずにと云ひたさうな風付をして天下を傲睨してゐる。

要するに氏は太ッ腹の漢子である、旁若無人の漢子である、四方ガラ開き体裁も作らず虚飾もない、褒めて言つたら天空海濶とでも云ふのであらう乃公は無學だからなアと無學を標榜して斗り學問があるので大きなことが出來ないと嘲笑した、之を聞いた朝吹氏は、雨宮に少し學問させて置たらまだ〳〵大事業を成したであらうと云ふた話しがある、惟ふに氏を亞米利加に生れさしたら面白かりしと思ふ、氏に取て日本は狹いらしい、氏は天下の絲平だけを、唯一無二の友達だと云つて居る、或はさうかも知れない、或る人曰く、遖の雨敬氏も安田善次郎

氏に頭が上らぬ、其れだけが誠に惜しいものであると、果して然るや否やを知らず、氏今宿痾を片瀬の海濱に養ひ、所謂空氣療法をやつて居る、肺病だとか云ふとなり、肺病も妙な門違ゐをしたものかな。

◎乃公は十六から十九歳までの間に鄕里の甲州に在て六百圓斗り溜めた、當時種紙を横濱で賣れば儲かると云ふ話で九百何十圓かの種紙を自分の溜めた金に他からも借金して買込み、矢澤某と同伴して横濱へ出た、所が相場が下つて一枚も賣ることが出來ない、折角溜めた金を臺無しにしたのみか他人にも三百圓斗り損をかけた、此時乃公は海へ飛込んで死なうと思ふた位、連れの矢澤が色々慰めて呉れたので漸つと思ひ止り、國へ歸つて見れば、親爺はこれで貴樣も商人になれる、貴樣の樣な小膽の奴は少し損すれば死ぬ位のことしか出來ない、今度の失敗は商人になる下た稽古だと云はれたことがある。

◎成功せんとせば須からく都會に出づべしと云ふので、二十六歳のときに再び横濱に出て、金子元兵衞と云ふ家へ食客になつた、其の時隣りに生絲の賣込問屋で信州屋と云ふのがあり、其處へ乃公は金子屋の貸金三千兩を取りに行くと、大勢の掛け取りの中で乃公が一番の口利きだつたから、一同を代表して後見人の龜善に懸合つたが取れないれて仕舞つた、其時に乃公が龜善を殺せと云ふたことがある、不思議に之が緣となつて其後信州屋の若後家の婿君となつた。

◎爾來賣込問屋を續けて居たが、生絲種紙の相場で何でも一萬二三千も儲けた、で嬉しさの餘り早速馬車に乘つて横濱中を驅け廻つたことがある、或は平民で馬車に乘つた先頭一番かも知れない、既にして二十八歳から三十歳の時にかけて大損をやらかし、到頭家を千三百圓ばかりの抵當に入れて仕舞ひ、仕方なしに下宿屋を家内に始めさして自分は相變らず相場師で暮してゐた。

◎其時父に二三百兩借りて來やうと思ふて甲州へ歸つたが貸して呉れない、其中に横濱の宅から昨夜丸燒に爲つたと云ふ手紙が來たので、百二十圓だけ借り出し、急に歸つて見ると扨て意外にも米五俵醬油四五樽外種々な物を懇

意な人から見舞として貰つてある、加之絲平さんや今村さんや高島權三さんなどから金に困るなら持つて行つて使へと云はれた、何にしても裏店住はいかぬと云ふので、南仲通二丁目の角に身代限りの札を貼つてある大きな家を三井から十五兩で借りは借りたが、忽ちの間に又々一文なしになり、又もや其所で下宿屋を開いた。

◎其中に歐洲での養蠶不作と聞き、生絲を信甲地方で買ひ集め、其れを横濱で賣て四千何百圓かを儲け、此外に種紙を扱つて一萬圓以上の身代になつたのが明治九年である。

◎其れから伊人デロロ氏と同行し、種紙を持つて伊太利に出掛たが扱てサツパリ賣れない、其時デロロが伊太利全國を回るから一緒に歩行いて演說をして呉れと云ふのだ、乃公は演說なんか出來ない、仕方なしにとんでもない歌を唄つて聞かせるとデロロは此人が日本の豪い養蠶の御師匠さんだなどゝ吹聽する、如何にも滑稽極まる話であつたが其中に大事の種紙に虫が沸いて一文にもならなくなり、愈々歸る旅費までなくなしてしまつた。

◎明治十年に政府が不換紙幣を發行した爲め一圓札が五十錢六十錢位に下落したことがある、當時五代友厚君の參謀となつて之が下落を防き、大分回復のついたときに五代君に金儲けの傳授を受け、其通り行つて二十萬と云ふ大金を儲けた、其時の二十萬圓は今の百萬圓にも當る、其金儲け法と云ふのは政府が銀を賣り出す機會を前知し、先き廻りして相場をやつたのだ。

◎さうかうする內に明治十五年に朝鮮の騷動が起つた、花房公使が濟物浦まで引上げたと云ふ電報が來た、すると賣つて置いた銀貨が忽ち騰貴して紙幣が下落し、結局百何十萬圓と云ふ損失を來たして又も元の杢阿彌と爲り、住宅を叩ぎ賣つて九尺二間の裏店へ這入つた。

◎此の大損以後に少し方針を立て直して金の出來た其都度〳〵、六十圓位で公債を買ふて置いた、それが十七年になると値が昂つて額面通りの百圓になり、スッカり賣つた其儲けで大に地所を買つたは好いが、信州輕井澤の新開

地へ葡萄園を造つて失敗した、何しろ海抜三千二百尺の高地で寒氣が零點以下と來て居るから堪らない、ごんなにしても凍つて根が枯れる斗りである、葡萄で苦しむこと殆んど三四年、今度は黒麥を蒔いたら良からうと思ひ、ワザ〳〵露西亞種を十俵取り寄せて蒔いて見た、然るに何時迄經つても芽を出さない、ほじくつて見ると黒麥は其儘ちやんとしてゐて一粒だつて生へないそれも其筈乾燥した黒麥であつたのだ。

◎二十三年頃から落葉松を植付けたがコレも失敗と云はねばならぬ、輕井澤では五十年經たなければ落葉松が用材にならない、若し天城山の麓でやれば二十年の後には確かに用材になる、湯ケ島でやれば八年位で炭に焚ける、又日向の或所では差木で結構に出來る、こんな工合で地方と氣候により年限の差がある、つまり殖林は用材に供する目的であるのに三十年から損をしたとは自ら顧みて如何にも馬鹿をしたものだ。

◎砂金の採集には乃公頗ぶる苦心したが其苦心の効果が更に現はれない、乃公は砂金の出さうな所には日本國中行かない所はない、そして乃公は技師よりも確かに砂金のことに就ては明かるいと信じてゐる、又實際にさうである故榎本君などは頗る熱心家で採集器械までも持つてゐた位、私も隨分探つて見たが器械を据へ付ける程の所はないのだ、要するに砂金には私一代の五分の一の時間と五分の一の金とを使ひ捨てた、今でも何時かはやつて見やうと思ふてゐる。

◎明治二十八年に鐵管事件で一時囹圄の人となつた、其順序を話すと製鐵業を盛ならしむるは富國強兵の基礎なりと云ふのが乃公の素論であつたのだ、所が二十五年の末に東京へ水道を敷く樣になり、鐵管が必要となつて來た、乃公は日本で製すると云ふ論者であつたが、澁澤男は外國の鐵管を買はんとしたので、壯士が馬車に斬付けたことがある、斯く議論は二派に分れたが到頭東京市でも日本で製することに一決し、其結果乃公等之が主と爲り、月島へ鑄鐵會社を設けて製造しかけた、然るに其時の試驗は頗る無法なもので殆

んど合格する鐵管がない、從つて會社の經濟が堪へられなくなり、一面會計の方が紊れて來たから乃公が整理に掛つて濱野茂君を社長に据え、是れで内部の整理も出來、市に對しても納期を誤らぬ樣になつて來た。

◎然るに鐵管の番號を一つ取替たとか埋金をしたとか云ふ廉を以て社長の濱野君は勿論關係者たる乃公も遂に縛られた、外國では鐵管に錆る藥を塗つて錆させるから決して水が洩らない、所が當局技師が外國製を買はう〳〵と思ふてるから反對に油を引かせて錆させぬ樣にして六百目の槌で十五分間叩くから大概不合格になる、然し二三日置くと錆が出て來る、其錆たのを持つて行つて試驗すると皆合格する、だから會社では一度不合格になつたものも埋金をして持つて行く、之が抑も詐欺鐵管と云ふことになつたのである。

◎二十七年には陸中國仙人鐵山を四萬圓で買ひ取つた、馬鹿に高く買つたが實は一步を製鐵事業に進めやうと思ふたからである、所が手を着け初めると丁度日清戰爭が起り、資本も何も廻らなくなつて之を中止した、二十九年迄は乃公が牢に入れられたから手を着けず、三十二年から再び着手して卅七年迄に財界不況中苦しい思ひをして五十萬圓から注ぎ込んだ。

◎熱海人車鐵道をやらうとした事がある、其際熱海の所有地を御料局に賣上げて大儲けをした岩崎家に株を持たせやうとした、然るに岩崎では一株も持たない、帝室からは二百圓の御下賜金があつたばかりで誰れも株の持手がない、三年經つても四年になつても株が寄らない、仕方がないから自分單獨で遣掛けると鐵管事件で牢へ入れられ、丸で仕樣がない、ソコで其善後策を桂二郎さんに賴み、又自分は牢の中から銀行家を呼び、金を借りて何うやら仕上げた、扨て仕上げたは好いが利益がない、やつと年一朱か二朱の配當しか取れない、今では可なりのものになつたが、其當時は全く以て泣き面を蜂に螫れた樣なものであつた。

◎旅行中の失敗では九年に外國へ行つたとき紐育で面白いことがあつたホテルで或る朝に朝寢をしたと思ひ給へ、連れのものは外出して居ない、言葉を

知らない自分は差當り朝飯を食ふに困つた、ソコでボーイを連れて人の喰ふてゐるもので私の食ひたいものを指さして歩いた、又歸國の時に丁度印度洋航海中、大勢の外國人が英語は出來るかとか、佛はどうだ、獨乙もやれないかと云つて乃公を嘲るのだ、所で乃公も一計を案じ、君方は日本語が出來るか、馬鹿野郎を極めつけてやつた、跡で同船の橋本網常博士の話に依れば、彼等外人同志は、成程我々は日本語を知らないと云つて居たさうだ。

馬越恭平氏

馬越氏は言ふまでもなく財界の重鎮として一般社會より多大の敬意を拂はれつゝある一人なり、而して氏に對する二種の異なれる世評あることを發見した、一面の觀察者、即ち氏を惡しざまに非難する側から云へば、氏は氏の活動を助るに足るべき立派な乾兒を持たない、氏の性質中に少からざる冷たき分子を含有すと云ふのである、之に反して他の一説は、全然氏に讃美の辭を捧げて居る、曰く、「馬越氏は虛心坦懷の人なり、毫も邊幅を飾ら

ざる人なり、藹然たる眞氣の中に、未た失はざる三分の覇氣を包める一個獰易からざる好漢なり、冷たき分子ごころか寧ろ熱情に富める漢子である と、前後二說孰れが是孰れが非、ソハ予輩の吟味せんと欲する所でない、唯だ予輩は、氏を指して財界一方の大親分なりと認むべき十分の理由あるを信ずるのだ。

氏や齡古稀に近からんとして而かも却々頑丈な所あり、現に此頃快氣燄を吐いて曰く、「奮闘活躍正に今後に在り、既往の小經歷は單に手習草紙を汚したるに過ぎざるのみ」と、元氣如何にも旺なりと云ふの外はない、蓋し是の元氣は、おのつからなる天分及体力の然らしむる所なるを疑はざれども扱ては又去年の歐米漫遊に由て、深く西人の勇氣に學ぶ所ありし爲めかとも思はれる。

千波萬波を湧かせる財界現時の危險なる風潮に對し、氏は飽くまでも泰然自若たる態度を示して居る、且つ依頼主義を第二の天性とする紳商の多きに似ず、氏は一代の顯官貴人にも、故なくして腰を折らぬと云ふ一種骨太な所がある、ソコが即ち財界一方の親分として異彩ある馬越氏の馬越氏たる所以ならん、意氣愛すべしと云ふべしダ。

氏自らは茶の湯が第一の道樂だと云つて居る、請ひ問ふ、第二第三の道樂如何、或る一方の好き者として、其名の新橋邊に謠はれて居るのも敢て短しと云ふべからずである、花晨月夕、往々髪を染めて出陣する事もあるらしい、お達者と云はざるべからずだ、而かも之と同時に氏は事業道樂の一人ではあるまいか、然り、たしかに事業道樂なりと云ふを憚らない、扱ては氏の口頭を漏れ出てたる失敗實歷談なるもの大要左の如し。

◎先づ麥酒會社に就てお話申さう、時は明治廿二年、歐化主義流行時代に際し、資本金僅か三十五萬圓を以て麥酒會社の創立を見るに至つた、當時技師として獨逸人二名を聘し、原料を外品に仰ぎ、エビスビールと稱して營業を開始したのは即ち其れである、然るに何が偖て當事者は素人であるし、且つ

我國始めての事業にして全く無經驗なりしが爲め、輸入のストックビールに幾んど全勢力を占められて居た、是に於て創業後二年にして早くも經營難の聲を聞くに至り、株の多數が三井銀行に流れ込むだ關係から、之が整理上、其際三井物産の理事たりし私が、選ばれて同社々長の椅子に据えられた。

◎當時整理善後策の第一着手として、先づ三十五圓拂込みの株券を二十五圓に切り下げ、亦俸給高き外人を雇ひ置くことが同社經濟の許さゞる所なりしを以て、一日も早く日本人の手に依て之を醸造せんとし、大學教授の長井博士に謀り、藥學士上野金太郎氏を迎へて研究の爲め獨逸へ留學せしめ、斯くして内部の改善を謀ると共に、外に向て販賣擴張の道を講じて見た。

◎販賣方法に付て實際少からざる苦心を拂ひ、其結果一般社會と密接の關係を有するものゝ力を藉るに決し、即ち醫者、藝者、役者の力に依て之が販路を求むべく大に盡力した、幸ひ之が圖に當り、明治二十五年に至りてヤット四分七厘の配當をするまでに漕ぎ付け、一同より感謝狀に添へて金杯を贈られた様な事もある、此等は失敗の成功とでも云はゞ云ふべきものであらう。

◎明治三十四年の伊藤内閣が、增稅案を議會に提出して貴族院の反對を受けたる時、麥酒に對しても一石七圓を課稅せらるゝことになり、極力反對運動を試みしも遂に其筋の容るゝところとならなかつた、そこで日本倶樂部に於る或る集會の席上、伊藤公初め各大臣の出席を幸機として麥酒課稅の不平演說を遣つて見た、其趣旨は斯うである、「昨夜夢に辨財天が余の枕頭に顯れ、汝ち常に花柳の巷に出入し、勿体なくも伊藤公の寵妓を犯しつゝありと云ふは是れ非常なる罪惡なり、麥酒の課稅も畢竟罪惡の應報ならん、予怫然として答へて曰く、所謂藝者なるもの、斷じて伊藤公の專有物にあらず、縱令大宰相の寵妓を近づけたりとて、賢明にして宏量なる大宰相は、眞逆か其れを根に持つて麥酒課稅を敢てするにあらざるべし」云々と云ふのであつた、滿座唖然として聲なく、司會者岡部子爵は意を坂谷芳郎氏に傳へて私に謝罪すべく要求されたとがある、私は敢然として拒絶した、當時人稱して馬越の間男演

說と謂ひ、今でもたまにヒヤカサれる一つの種子に爲つて居る。

◎三十四年に麥酒會社は三割の配當を爲し得るまでに發達した、然るに新課税の爲に最早や其れも出來ない、其後は二割ソコ〳〵の配當に止めて居た、然るに株主中の或る有力者が、考課狀に依て會社に格段の利益ありしことを知り、今幾分の配當を增して貰ひたいと云ふ新要求を持出し、且つ私が當時帝商銀行の取締役會長を兼任し居りしが爲め、其れもドレか一方にして貰ひたいと言ひ出し、つまり体のよき辭職勸告を受けたのである。

次第に依ては社長をも辭任致さう、併し配當增額の件は斷じて應ずることが出來ない、諸君は四分七厘の配當時代にすら、喜んで余に感謝の意を表された事がある、假令利益が增進したにもせよ　會社全体を鞏固なる基礎の下に置かんが爲め、此際强ゐて二割以上の配當を受けんとする諸君の要求を拒絶すると云つて斷然私に對する株主一部の排斥運動に就ては、某子爵の如き大有力の黑幕あり、事頗る紛糾せる結果として、遂に私は辭意を洩らした、ところが監査役を始め多數株主は私の辭任を聞き入れない依然社長の任に居れと云ふ企望であつた、併し俸給は減額されて他の取締役は增額すると云ふ奇觀を呈したから可笑しい、其後アサヒ、札幌、エビス三會社の合併出來て引續き社長の椅子を預つて居る。

◎帝商銀行の取締役會長時代を、人或は私の失敗時代だと許するものもあるが實に意外千萬の世評と云はねばならぬ、勿論同銀行は少からざる缺損額を生じたに相違ない、配當率の低かつたのも亦掩ふべからざる事實である、併し其れは前會長時代より馴致されたる自然の成行きに屬し、私の在任中は畢竟之が整理時代なりしと御承知下さるべし、若し前會長時代の貸出し其他に對し、容赦なく嚴重取立を決行せざりしことが私の不行屆であつたとすれば、其點に就ての非難は甘んじて之を受くべしと雖も一たび因緣を結びし得意先きに對し、紛糾錯綜せる前々よりの事情及關係をも顧みず、權利を楯にし人情を度外して一氣呵成に之を窮追するを愉快なりと私は感じなかつた、

同行當時の形勢にては、何人が局に當るも大發展を期し難かりしなり、幸ひ私はどうにか整理案を進めて聊か目鼻を付けた積りである、今尚私は依然として千六百餘り同行の持株を手放さずに之を所有して居る、前代及び私と同時代の同行重役にして、當時の持株を今に其儘所有するもの、私の外に恐らく有るまいと思ふ、實際私は同行の忠僕だと信じて居る、イクラ失敗だと評されても、否然らずと斷言することが出來る。

◎物論紛然たる例の日本製糖の重役は四十一年十二月に之を辭して、今は唯だ平ら株主の一人たるに過ぎない、株も始めより三百しか持たぬ、併し買入直段は一株たしか百七十圓位ゐなりしと記臆して居る、而して昨今其れが哀れ二十圓に下落し、爲めに幾萬圓かの損失を被るに至つた、首を回せば四十年の十一月、重役の職責として同社の帳簿を査閲し、實に其不始末に驚いた不始末と云ふのは、謂はゆる預け合と稱するもの即ち是れである、尚ほ其他に強て配當率を昂めんとする樣子もあり、割くべからざる或る費目の中を割て配當金に充てし形跡も見え、不審の餘り　酒勾社長及磯村秋山の兩專務に對して種々の警告を與へ、一面には顧問役の澁澤男に所懷を述べた事もある

◎四十年上半季の同社決算期には滿韓旅行中にて、翌四十一年の同期は歐米週遊中にて、此の前後兩期とも事實上私は關繫を離れて居た、と申して漫然同社の弊端病根を看過した譯ではない、即ち其弊端病根を發見したればこそ大破綻の來らざる以前に於て、內々穩かに之が匡救手段を講じて見た、然るに私の意見通り行はれ難い事情の伏在する爲め、曩きに見切りを付けて重役の地位を辭したのである、故に私は同社をして今日の悲運あるを致さしめた直接の失敗者と云はれずに濟む譯なり、左りながら前に申した損失は到底免るべくもない、若し損失が失敗ならば、何んとでも其れは他人の觀察に任せる。

◎失敗續出の時代とも云ふべき、日露戰後の會社熱には、御多分に漏れずして私も患者の一人たりしことを自白する外はない、當時私が重役として大關繫

を帯びし諸會社中、無殘にも解散の厄を招きしもの、先づ三千萬圓の日清瀛船を筆頭として、千萬圓の東京水力、同じく千萬圓の日清火災、七百萬圓の滿洲興業、三百萬圓の柞蠶會社等凡そ六千七八百萬圓ばかりの事業をマンマと失敗に了らしむるの不面目を求むるに至つた、幸ひ大部分は證據金を無事に戻して、其れでヤット大段落を告げし一塲の悲劇は、終生之を忘れまいと思ふ、而して之が失敗の原因は、勿論彼の反動的財界の不況に由ると雖も、併せて調査踈漏の罪や其他不行届きの多かりし結果なるを今更慙謝するの情に禁えない。

◎總じて株式會社通有の弊竇は、第一當事者の不誠實不勤勉、第二株主中の野心家が動もすれば平地に波瀾を起さんとするの點にある、而かも會社が一朝厄運に際會したとなれば、誰れも之を避けて容易に責任の局に膺るものがない、公徳上洵に歎ずべきの至りである。

◎一轉して對美人策の失敗をお話し申せば幾んど際限もない、マア其れは御免を被りませう、歐州巡遊中、其普請に五十萬圓も掛けたと云ふ素敵もないモスコウの風呂屋へ越中褌を忘れて謂はゆる旅の耻を掻き棄てた事がある、思へば今でも冷汗が流れる。

高田慎藏氏

東京府下多額納稅者の主位を占むる同氏は、弱を貿易界に稱する一人なり商界の進運に貢獻せる點より云へば、勳三等は決して虛榮ならざるを信ずべき理由がある、氏は湯島の邸宅より午前十時には必ず丸の内の高田商會に出勤して採配を揮て居る、和氣に充たさるゝ其風采は少しもキツからず額際の廣く見ゆるは禿げた爲め計りでもあるまい、一見ドコやら悠揚迫らざる所がある、口の利き振りも沈落いたものだ、道路傳ふる所によれば、

氏の今日あるを致せし所以のもの、夫人内助の功蓋し多きに居ると云ふ

◎私は更に失敗がない、併し對外貿易上に多少の蹉跌を來たした事はある、百萬圓のものを時と塲合に依つて九十萬圓に賣らざるべからざる事は敢て珍しとせず、斯な常有の事態は固より失敗と稱するに足らない。

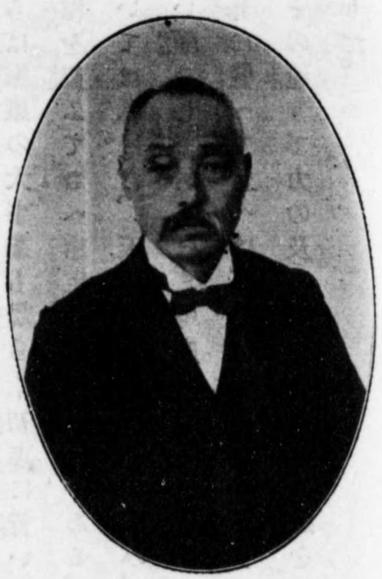
◎私は明治新商人中の古顏である、只大倉君だけが私より先きに商業に從事してゐた位だ、斯樣に古くから財界に關繫しては居れど、他の人の樣に各種の事業に手を出さない、堅く本來の輸出入業だけを大事に守つてゐる、澁澤氏の如く自分の重役をしてゐる會社の名も覺えてゐない位澤山の仕事をすることは到底私の能力の許さゝる所である、又自分の手馴れぬ事業に漫然名を列ぬると云ふことは實業家として無責任の仕業ではあるまいか。

◎相塲等には手を染めたことがない、唯々着實に熱心に此處まで漕ぎ付けたのだ、戰爭當時の仕事には少し面白いこともあつたが、實は之れを公言する譯に行かぬ、其筋の内命などもあつたのだから、之れだけは先づ御免を蒙ら

う、新會社勃興時代にも私は全く門外漢であつた、從つて失敗に近いともない。

◎秘魯銀山で少し許り損をした、誠に少し計りである、話す程のこともない併し話をせよと云へばせんこともない、私が歐洲から歸つて來ると三浦梧樓さんが有望な會社だから君の分として株を取つて置いたと云ふ、其當時米國シカゴのフエルドシヤーマー鑛山機械會社と私との間に商賣上の關繫ありしを幸とし、同會社員にして在秘魯の一技師に内々調査を委托したる所、其報告に由て案外貧鑛たることが判つた、サレド事既に跡の祭に屬し、有つたゞけの株は遂に全損に歸したのである。

◎私は物心の判らぬ時に養子にやられた爲めか、比較的忍耐力を養成したかの如く信ずる、小供なごは虐待とならざる限りに於て余り丁寧にしない方がよい、養母の撫育方が私に幸福を與へたかも知れない、私は大抵の苦勞を氣にしない質である、有勝の小蹉跌豈論ずるに足らんやダ。



牟田口元學氏

氏をして長く官界にあらしめば、疾くの昔、名を臺閣の一員に列せるやも知るべからず、氣を利かし過ぎて餘り早く野に下つたが抑々の失敗ではあるまいか。

東鐵問題ではサゾかし閉口したらん、橘中の仙と爲て姑く圍碁に隱るゝが寧ろ得策だらうと思ふ、仙乎俗乎、一年花飛ぶの時、目黒の高臺に浩嘯して夢る所其れ將た何事ぞ。

◎秦の始皇は一呼して四百餘州を掌握し、帝位を子孫萬世に傳ふるには學者があつては嚴しいといふので、書を焚き儒を坑にし、萬里の長城を築いて匈奴に備へ、徐福を蓬萊に送て不老不死の靈藥を求めた事は、誰も知る顯著の史蹟である。

◎斯くしても秦は二世にして滅亡した、從つて始皇の志は成功したものといへない、德川家康も十五代位で政權を奉還しやうとは思はなかつたであらう然らば家康の大事業も恐らく初志に背いたものと云はねばなるまい。

◎棺を蓋ふてさへ事定らざるものがある、成功とか失敗とか云ふとを眼中に置いては駄目だ、天地唯々正義あるのみ、小策を以て一時を糊塗し、其れで好い顏をして居るほど馬鹿な事はない。

◎碁に譬へて言へば、上手下手はあらうが筋道を違て打つ事は許さぬ、人生もその通りで力の及ぶ限り正しい筋道を辿り、須らく成敗を度外に措いて可なりだ。

◎旗鼓堂々の陣、氣勢變化の妙を存す、是れ自家の韜略也、倘し權謀術數を以て危功を策するものあらば、吾は與みせざる也云々、曾て僕は右樣の意味を自家の漫筆中に書いて置いたとがある、區々の成敗は僕關せず焉。

◎僕は明治十四年に官吏を廢めて有るたけの資本で公債を買ひ、其利子で生活が出來ないから一轉して馬車鐵の株券を買て見た、其れが因緣で二十二年に同會社の社長となり、電氣鐵道となつて、ツイ此頃まで勤めて居た、元來僕は閥といふ事が嫌ひである、從て自家の勢力を作らうとした事がない、馬車鐵から東京鐵道に至るまで、終始社長の地位に居ても其理想通りやつて來た。

◎東鐵今回の重役總辭職に就ては、僕自身と他の諸君とは自ら別問題に屬して居る、從て後繼重役に關して一言も容喙しない、東鐵重役の交迭は、僕一身に取て失敗といへば失敗とも云はれやう、併し自ら顧みて一點疚しい事が

竹内綱氏

氏は林有造大江卓の二氏と雁行せる土佐の豪傑なり、而かも林大江二氏の落托に似ず、大福長者と爲て異に澄して居る、曾て意を政界に得ずして一轉財界の人となりしが遒に扱け目のない所である。

◎自分は土佐山内家の宿老宿毛の城主伊賀主馬の家臣であるが、文久二年山内本藩に攘夷論開港論の二派があつて、爭鬩の結果攘夷説に一決し、伊賀家は宿毛と天満地港との六里の間を警備することとなり、自分の家は伊賀家の家老であつたが爲め、早速自分は一人の同僚と共に、士卒百餘名を引卒して之が警備の任に就いた、銃はといへば和蘭から買入れた古式元込のミニヘルと稱するもので、役目は則ち異國船打拂といふのである。

◎所が或る日右の天満地港に外國軍艦が一艘やつて來て碇泊した、サア大變例の小銃で打拂はなければならぬ、併し考へる迄もなく、元込の小銃で大威力ある軍艦に敵し得らるべき筈がない、此時自分と他の一人の隊長との間に議論が起つた、打拂ふかどうかといふ問題である、而して議論の末、何の用で來たのか一つ先方に聞いてみやうといふ事になり、自分一人で軍艦に出掛けて行つた。

◎彼等も驚いたらしかつたが手眞似で來意を通じ、艦長だと云ふ漢子に會見はしたものゝ、言葉が分らんので何うするとも出來ない、その中に彼れは英語箋といふ英漢辭書然たるものを持つて來て、其れと手眞似で漸つと用事を辨じ、詰り飲用水汲取の爲に寄港し、明日正午抜錨するといふ意味だけ判つ

た。

◎果して同軍艦は翌日開帆した、併し自分は役目を懈つたといふので謹慎仰付けられた、是より先き自分は鹽谷宕陰の隔靴論などを見て居たので、藩の攘夷論者武地瑞山其他の諸氏と聊か意見を異にし、開港の已むべからざる所以を主張した事もあり、單身外國船に行つたのを何か意味ありげにとられて右の始末と爲つたのである。

◎それで同藩の若侍等が竹内を殺して仕舞へと其晩協議をして、愈々自分の屋敷へ斬込むといふ話しがあり、之に對して大に警戒を加へたとがある。

◎所が其外國船は天滿地を解纜して更に本藩の高知に行き、本藩でも議論沸騰したらしいが、結局何等手出しもせずに之を看過した。

◎本藩で然る上は當方でもお構ひなしといふので、自分の謹愼は解除され、それで一段落ついた、若し彼の船が天滿地から高知へ立寄らずに行くか、但し高知に立寄つても例の異國船打拂で戰爭でも始まらうものなら、自分は激昂せる若侍に斬られるか、切腹仰付けられるか、二者何れかの運命を招いたに相違ない、幸ひ此事なきを得たるは所謂天祐とも云ふべきものであらう。

◎元來自分は妙に無經驗な事をして見たい質であつた、之れまでに少からざる失敗を繰返したのは畢竟此の宿癖の罪である、今では漸つと之を悛めた。

末延道成氏

氣骨あるものは兎角出世しない世の中なり、氏は古い法學士にして、後輩往々大名を成したるものあるに拘らず、イツ迄も保險會社の取締役位に固定するのは、比較的骨硬い爲でもあらうか、左もなければ餘り早く安樂椅子に腰を卸した故かも知れない。

殆ど一髪一毛をも留めざる氏の禿頭は、宛も蜀山の兀たるにも似たるべし併し這は別に愁へざるべからざる程の事でもない、蓋し氏は苦の生えた財

界の學者である、然り學者である、ソレだけで澤山だ。

◎僕は明治十二年に大學を卒業して而かも人並みより早く好地位を獲得したのが、寧ろ失敗であつたと思ふ、世に早く諦はれると大抵は早く倦かれる、試みに鳩山和夫君と小村壽太郎君とを比較し見よ、三十年前鳩山君が如何に法律家として名聲嘖々たるものであつたか、小村君などは到底敵すべくもなかつた、然るに今や則ち何如。

◎考へても見たまへ、壯年時代に餘り速く賣り出すと思ひ掛けぬ一種の嫌猜を招く樣な事となる、生意氣だなどゝ上級のものから睨まれ、下の方から妬まれる、天下此の如く策の得ざるものがあらうか、自ら求めて新聞雜誌に敏腕を謌はれんとする若手の實業家は、前途寧ろ危險であるまいか、今現に僕の振はざるは、始め比較的振ひ過ぎた結果なりと信じて居る、惟ふに下級から順次に這ひ上るのが一番確かである、併し出類拔羣の人物は姑く別論に付するの外はない。

井上角五郎氏

醫者たるの風貌を具へずとて、舊師長谷川泰君に見棄てられたる井上氏が偶然福澤翁に見込まれて令嬢達の敎師と爲り、其れが榮達の基を爲したりと聞いては、人間の運命ほど奇しきものはない。

故中江兆民居士、曾て痘痕滿面の氏を目して蟹甲將軍と言ひ做したが爲め蟹甲の名遂に天下に高きを爲し、今でも其れが一般の通り名と爲つて居る蟹甲の二字、惡字面に似て惡字面にあらず、氏の今日あるを致せるもの、固有の快辯辣手に由るとは云へど、一つは蟹甲將軍の稱號が普く輿人に謠はれし結果ではあるまいか、此點に於て寧ろ地下の兆民居士に深謝して然るべきであらうと思ふ、氏は政界の剛のものにして同時に財界の剛のものなり、覇氣もあり眞氣もあり、又洒落な點もある、何時ぞや數千金を投じて札幌の一阿嬌を根引し、僅か三日にして逃げられた話がある、蓋しコレだけは蟹甲の祟りであらう。

◎一切の困難一切の災厄を極力排除し、力及ばざるに至つて休すれば其れが即ち天命也、大人物は決して當面の窮厄に困頓すべきものでないと、是れは故後藤伯が予に與へたる豪傑學の敎訓であつたのだ、予は毎に此敎訓を體して自分の信ずる方面に向ひ、絕えず猛進を續けて居る。

◎成功も時機なり失敗も亦時機なり、均しく時機なるの點に於て結局兩者は同一のものである、而かも一切の事棺を蓋ふて始めて定まるとすれば、天地に生ある間、青天白日、唯々大膽に仕事を遣つて除けるだけの事だ、予が財

界の人となりしは、十五年前松方侯の勸誘に由て北海道炭礦鐵道の專務取締役となつた時に在る、而して其時から予は數會社の重役を兼ぬるの不可なるを信じ、一意同會社の進歩的經營に力めて居た。

◎然るに己むを得ざる事情の存するありて、三十年頃北辰石油會社の重役と爲り、又三十八年にも或る他の一會社の重役たりし事がある、併し經營其緒に就くに當て何れも之を辭し、現今は品川銀行の監査役を兼ねて居るのみだ所くて予は何等財界の失敗を味はつた事がない、若し假に失敗があつたとしても、或る實歷上の產物は、唯々經驗者自身が之を感得する外、人に語らんとしても其呼吸は旨く語り得らるゝものでない、猛進せよ〳〵、失敗なんかを顧慮しては駄目である。

平沼專藏氏

世間平沼氏の名を知らざるもの無けん、單に横濱の平沼と云ふだけでは今や少しく不適當の感がある、蓋し氏は精力の權化にして、其精力主義は毀譽一ならざる七十餘年の歷史を一貫して居る。

氏は如何にも冷酷の人のやうにばかり聞えて居るが、近年の平沼は中々隅に置けぬ男となり、貧民の苦惱を救はんとして平沼小學校を設立し、毎年數千金を投じて是等の子弟を敎育する外、又横濱銀行の損失數百萬圓を自

己一身に負擔して敢て之を辭せざる如きは近頃見上げたる男と謂ふべし。

氏や早曉起床して四斗樽一ぱいの水を浴ること五十年來恰も一日の如し、曰く、斯くすれば神氣快然、誰に逢つても負ける氣遣ひなしと、此等も精力主義の一表現といふべきものであらう。

◎今より五十年前橫濱開港當時、即ち二十四歲の時より七十四歲の今日迄に隨分念の入た切ない失敗もあるが、就中一昨四十年四月養子延次郎の失敗に伴へる損失二百萬圓、橫濱銀行支店の損失三百九十一萬餘圓、都合六百萬圓を一時に負擔したのは、直接自分の失敗にあらずと雖も、根本に溯つて見れば、實は自分の不明からして此の結果を招いたので、自分は矢張り自分の大失敗と信じて居る、而して事の經緯は、其當時新聞紙に由て世間に傳へられた通りである。

◎自分は養子延次郎に早く財產を分與した、元來延次郎は寧ろ小膽過る程の人物にて決して惡人ではなかつた、デ自分も安心して財產を遣たのだ。

◎世の富豪の子弟等、其多くは、親の財產を貰て頑然頑守し居る凡物か、然らざれば向見ずの事業に指を染めて財產を蕩盡する馬鹿ものか、二者其一に居るを常とするが如し、延次郎の如きは蓋し後者に屬するものであらう、何れにしても延次郎の失敗と橫濱銀行東京支店の失敗とで合計六百萬圓、其れを辨償し其れを整理するまでに自分の苦心は中々尋常一と通りではなかつた

◎橫濱銀行は百萬圓の株式組織で、表面自分に關係はないのであるから、失敗後之を解散してしまへば、假令何千萬圓の失敗であらうとも、責任は當然解除さるべきである、併し其れでは橫濱銀行を信用して吳れた人、言はゞ天下の人に此の平沼は申譯がない、幸ひ人に一文の損失もかけんで無事にあの難關を切り抜けて來たが、今思へばよく整理が出來たものだと寧ろ不思議に感じて居る。

◎或る外國人が二十六萬圓の損失の爲めに發狂した、平沼は六百萬圓以上を負擔して、よく氣が狂はなかつたな、と大隈伯爵に笑はれたが、氣も狂はず

氣も亂さなかつたは、畢竟自分の身代が人に讓られたのでなく、自分一人で作たものゆへ、誰れに憚る所もなく、所有財産を提供して自分の面目を維持することが出來たのだ。

佐竹作太郎氏

甲州派の代表的勢力家なるだけに、中々隅に置けぬ代物なり、第十銀行頭取にして衆議院議員及東京電燈會社の社長を兼ぬ、氏自ら曰く、私は懸引も何も無い、極く平凡に極く眞つ正直に六十年を送つて來た斗りであると果して然るや否やを知らず。

◎私は元來が銀行員である、御承知の通り銀行業と云ふものには大して失敗のあるべき筈がない、金を貸付けて返濟期が遲れたとか、返濟能力なきもの

に見込違ひにて貸したとか云ふことはあつても、此等は失敗でも何でもない日常有勝のことで、十錢で賣るべき品を、誤つて九錢に賣つたと云ふ樣なものである。

◎明治六年銀行條例發布と共に大藏省に、公債を擔保とすれば國立銀行で紙幣を發行することを許された、之が爲め國立銀行はドシ〳〵設立され、全國に百五十程あつたと思ふ、明治九年に私は第一銀行に三月程使はれたことがある。

◎明治七年ごろ甲府市に興益社と云ふ會社が出來、其れが變形して十年に第十國立銀行となつたのである、其始めに當て私は支配人に選まれ、十三年に月給廿圓の取締役兼支配人となつた、今から思へば實に馬鹿々々しい安い月給である、併し其當時頭取でさへ三十圓しか取れなかつた、十五年に至つて始めて頭取になつた、其以後今日に至るまで頭取をしてゐる。

◎餘り他の事業には手を出さぬが、二十七年頃電鐵の取締役となり、廿九年に電燈の取締役となり三十一年電燈社長に缺位を生じた爲め、私が其椅子を占めたと云ふ迄の事、極めて平穩な生涯と云つて宜しい、私は株式に付ては失敗しない、只株主として株の高下により多少損得した經驗があるだけだ。

◎二十二三年頃秘魯銀山には多少失敗した、此れを始めるに至つた動機は、外國人は日本へ來て仕事をするから、我々も外國へ往つて仕事をしやうじやないかと云ふので企てた仕事だ、併し私は人の勸めによつて株を持つたに過ぎない、其發企者は高橋是清、小野金六、前田正名、高田愼藏、三浦梧樓などゝ云ふ顏觸れであつたと思ふ、此の事業は何んだかペテンらしい形迹があり、其時に關係した技師工學士の某はアの失敗後、未だに世に出ることが出來んと云ふ始末で、私も丁度五千圓斗り損をした。

◎私は全く故人藤村紫朗先生の恩顧の下に人と爲つたのである、先生が京都府權參事であつたときに知遇を得てから、大阪へ轉任の時にも連れられて行き、六年に先生が山梨縣權令（今の知事）となつたときにも甲州へ御伴をしたの

です、先生が盡力して前に申した興益社を設けたので、私は其れに這入ることになつたのだ。

◎二十八年に甲州人が馬鹿に東京電燈株を買占めたことがある、彼等は金のない癖に高價で買占めたのだから株を引取る其借金の爲に首も廻らぬ破目となつて困つてしまつた、夫れを卅一年頃迄には悉皆整理をしてやつたが、此れには少し困つたけれども、敢て失敗と云ふ程でもなく無事に納まつた。

◎今も私は貧乏人です、元來衣食住と云ふものに餘り氣を付けないから今に至るも自分の家と云ふものがない樣な始末である、又人が何と云ふても其れに拘泥はせない、代議士ですか、其れは甲府市から前後四回選出されだのである、私は京都の生れであるが、甲州でどうか立身の礎を作つたから全く故郷の思をなしてゐる、コレだけでは失敗談になりますまいが、外にお話しはないのだ、全く平凡なものです。

村井吉兵衛氏

烟草屋の村井氏一轉して銀行屋と爲り、サンライス、ヒーロー時代の手腕を現に財界に揮ひつゝあるを見る、曾て其所製の烟草に、昇る旭を意味するサンライスの銘を附し、若くは英雄を意味するヒーローの名を付して顧客の喝采を博せるなど、那處までも機智に富み氣轉の利いた遣り方なりと恐ろ感心の外はない、氏を人中の鯨だと評する人がある、仔細を聞けば其眼付きが鯨に似て居ると云ふとだ。

◎何事業に依らず、事業其ものに趣味と研究力を持てば、屹度愉快が伴ふに相違ない、從つて其事業は發達する、研究もせず趣味も起らざる其れ以前、即ち無經驗時代には兎角失敗が多い、然し此失敗が後ちの啓發になるのであるから、一面に於て寧ろ失敗を歡迎せねばならぬ樣な事もある。

◎前きに自分の烟草會社が未だ米國の烟草仕入のため派遣して置いた立石佐次郎君が、自分のためを思ふてやつてくれた仕事のために大損害を蒙つた事がある、立石君は米國の大學に九年も留學し、所謂米國通なるが故に、自分は仕入及其他の監督を托して居た。

◎話し變つて米國のボルチモーアといふ市場は煙草の産地であつて、此處にあるリカード、チフチー、コンパニーは殆ど北米の煙草界を支配する大會社である、從て此市場の相場が常に一般の價格を左右し、即ち或る意味に於ては一の同會社の利益のために大市場が設けられた傾きがあつた。

◎恰度明治三十一年、自分は四百萬圓ほどの烟草買占めをやる必要があつたので、其れを右の立石君に命じた所が、何でも充分に買ふには當方の勢力を示さねばならぬと考へたものと見え、立石君は市場のある總ての場處に於て、先づ演說を試み、日本に於ける村井は東洋の煙草市場を支配する大製造家である、而かも其れが今度大買占をやると云ふことを盛んに吹聽したのである、時恰も煙草の仕入時季なりしを以て、此の演說に由て力を得たる耕作人は最早や從來の價格では賣らぬと云ひ出した、仲買人は大狼狽の結果自分に打電する、其中に價格は三分の一弱暴騰した、然し時季が時季であるから高價でも已を得ず仕入せざるを得ない、遂に非常に高いものを背負はさるゝことになつたのだ。

◎立石君の考では、たゞ村井の勢力を知らしむれば買占めは容易であると信じ、價格騰昂の點にまで想ひ到らなかつたのである、是が未だ立石君の若かつた爲であらう、然し是がため米國に於ける會社仲買の間に恐慌を起し、人

を日本に送て自分と會見せしめ、遂に一千萬圓のトラストを造る一の動機を生んだのだ。

◎後ちに考へて見ると、立石君の演說一回毎に凡そ何萬圓といふ自分の損害に歸し、總高通じて數十萬圓を失つた、惟ふに何事も實驗の結果でなくては だめである、學者では商賣は出來ぬ、從つて自分は一に實際主義を重んじて居る。

五十嵐敬止氏

多額納稅者、貴族院議員、日本勸業銀行理事の肩書に滿身飾を施せる同氏は、其れは將た何等の失敗談を爲すであらうか、其四角い顏と皺枯聲とは一種の特徵である、而かも水を趁ひ波を追ふての話し振りは滾々として盡る所を知らない。

◎私は父の老後の子で、甘やかされ過たから餘り物にならない人間になつた自分一個の仕事をしたことが無いので從て失敗もない、併し銀行の擔任事務

では何後でも失敗してゐる、私は債券の方の掛りだが扱て債券賣出しの時に大滿足の成績を擧げ得たことがない、債券募集と云ふ樣な單純なる一局部の事でも、愈々となれば七八分しか成就せない、花開て風雨多し、兎角世の中は意の如く行かないものだ。

◎總体から云へば、債券募集の最困難時代は三十二三年頃であつたと思ふ、戰爭時代には却て非常な好況を呈し、其れが又一昨年頃から漸次不況に陷つて今では其極に達してゐると概言することが出來やう。

◎勸業銀行に這入る前に地方小銀行の頭取だつたが、其銀行屋になつたのと貴族院議員になつたのが失敗だらうと思ふ、銀行屋になつたのが何故失敗であるかと云ふに、始め私が地方銀行經營中、土地を抵當に銀行の金を融通すると云ふことが農民に對する一大福音なりと信じ、此の土地抵當銀行を設けることが唯一の理想であつたのだ、所が何れの銀行でも土地抵當は餘り喜ばない、從つて農民は金の融通を計るに困つて居る、扨て自分が遣つて見やうとしても思ふ樣に甘く行かぬ、寧ろ其れなら銀行屋になるでなかつたと云ふ樣な感がする。

◎又議員になつたのが何故失敗かと云ふに、私は正直の處學問がないのだ、學問がないから議員で居ながら法案の精神を解し得ざることがある、故に議員になつたが失敗だ、と云ふのである、今の議員は前々期あたりの議員に較べると、概して學力のある人が揃つて居る、然るに私などは始めから同じであるからいけない、少年の時に少し勉強して置けばよかつたが最早や追つ付かぬ。

◎二十二年に亞米利加へ留學に行きは行つたが、上陸するや否や母が死亡したと云ふので直ぐに歸朝し、其れから以後再び外遊を試みたことがない、這は固より失敗と云ふべきものではなけれど、詰り一失脚たるに相違ない、洵に以て遺憾山の如しである。

鈴木藤三郎氏

氏の面貌は明かに意思の堅固なることを示して居る、氏の小僧時代に、ア
ノ小僧ほど強情なものはないと云はれて居たさうだ、而かも舊態依然、今
尚ほ當年の強情を失はず、天分敏修養敏は敢て之を問はざるべし、現に砂
糖にせよ醤油にせよ、事に當て氏が全力を傾注するは爭ふべからざる事實
である、遠州生れの一無名の小僧が、兎も角天下に鈴藤と謠はるゝまでの
漢子に爲り終ふせたのは、畢竟堅固なる意思の賜ものであるかも知れぬ。

可なり圭角のあつた漢子が、年の故か近年大に老熟の境に近づいて來た、
聞けば六十限りで實業界と絶縁すべき料見なりとかや、扨ては妙に悟りを
開いたものだ、此頃世に喧しき日糖問題も、善き時機に遁れ出たものだ、
悟りの開いたは、蚤く此の時からといふべしだ。

◎日本醤油醸造會社に關する問題は、今まだ成功不成功を公表すべき適當の
機會でないゆゑ、ソハたゞ諸君の推斷に一任するとして、過去に於ける失敗
の二三をお話し申さう。

◎日本製糖會社の事業に付て、明治二十九年頃に歐米へ糖業調査に出掛けた
その時製糖の副産物即ち糖蜜から酒に代るべき飲料を醸造し得る事を發見し
た。

◎此の糖蜜の處分法に就ては、何處でも困つて居つたので、是が酒の代用飲
料に醸造し得るとすれば、國家の幸福であると信じたので、翌三十年歸朝の
際、之に對する諸器械を購入して來た。

◎現今我邦で清酒を造るために、米の費さるゝ額は一年四百萬石以上である若し糖蜜から日本人全部の飲料酒が出來ないにしても其中百萬石に代るものを得られれば、實に國家に大利益がある、米であれば輸出が出來るが、日本酒でば全然輸出が出來ぬ、此點から見て此事業は、國家の生產に大關繫があると信じた。

◎酒に毒素のあることは、何人も知る所であらう、之は酒の中にフーゼルオイルといふものが含蓄されて居るからである、所がブランデー及此の糖蜜から釀造さるべきラム酒の二種には、右のフーゼルオイルがない、即ち國家經濟の上からばかりでなく、衞生上からいふても結構なことだと思つた。

◎それで三十二年に、自分で少し釀造して見て衞生試驗所は勿論其他に就いて試驗をした、所が非常な好成績を收め得たので、大藏省に課稅の事を聞くと、ラムの釀造は酒造稅中に這入らぬから無稅であるとの決定を受けた。

◎愈三十三年の一月、五十萬圓の株式組織を以て、南葛飾郡小名木川にラム製造株式會社を創立し、二十萬圓も廣告費用を投じて製造に着手することにした。

◎然るに此のラム酒の爲め、他の酒造家は價格の點より大打擊を受ざるべからざる地位に立ち、大藏當局に運動したかせぬかは知らぬが、三月になつてから、ラム酒も酒造稅として課稅すべきものなりとの通告を突然に受けた。

◎有稅酒とせば、勢ひ價格も倍以上に引上げざるべからざるのみならず、既に無稅の積りで、總ての準備を爲し了りし後なので、此の課稅問題に就て九月まで大藏省と交涉を重ね、遂に屈服せざるべからざる事となつて、同事業も一時中止の運命に會し、忽ち五十萬圓以上の損失を招いた。

◎此度は話題は違う、然し繼續した失敗である、ソレは三十四年に於ける日本製糖の失敗だ。

◎時の內閣は伊藤內閣であつた、其當時開會された議會に、砂糖消費稅問題の提出を見、法律の實行期は三十五年十月一日よりと示された、然るに十月

一日からの課稅となれば、其間六ケ月ある、此間に外國糖の見越輸入をされては、我國製糖業者の大恐慌のみならず、外國無稅糖と內地の有稅糖との競爭を生ずる、而して其結果內地糖業者の失敗に歸すると云ふの故を以て、自分等糖業關係者は、法律の實行期を三十五年四月一日に變更されんことを政府に要求した。

◎政府も洵に然りと氣付いたが、提出後の成案を一寸撤回も出來ず、ソレゆへ自分等は議會に直接の運動をした、勿論外國品の輸入されるのは、國家經濟の問題であるから、如何に議員が腐敗して居ても、如何に輸入商の運動が劇烈であつても、正義に敵すべくもあらずと安心して居たのが大失敗、議會はとう〳〵政府案可決といふ好名辭の下に吾人の主張は否決の運命に終つた

◎頼むは貴族院のみである、當方でも熱心に運動をした、貴族院の方は我等の主張を是として修正する約束であつた、所が貴族院では豫算全部に對し、大削減を加へんとしたので、竟に詔勅の煥發を見、爲めに貴族院も一字一句だに修正せず、政府案を可決することとなつた。

◎是に於て砂糖輸入商は萬歳である、何んでも貿易表に示された砂糖の見越輸入額は莫大なものであつた、之と同時に自分の關係せる日本製糖會社の如き、五十圓拂込の株が二十圓に下落し、會社の缺損額二十七萬圓に達して、三十五年の春には將に破產に瀕せんとした、幸ひ三井の保護を受け、漸く破產だけは免るゝことを得、其後稍や順境に向て自分等重役は退職した、右の如く當時假令ひ弱つたとがあつたにしても、自分等在職中に於ける日糖の境遇は、決して今日の如き淆亂の狀態でなかつたと信ずる。

◎人の一生は必ず千波萬波の起伏がある、成功成功にあらず、失敗必ず失敗でない、要するに如何なる事業に失敗しても、苟も前途有望である以上は、誠意誠心それを繼續さへすれば、必ずその失敗を償ふことが出來る。

◎部下を採擇する事は非常に六ケ敷しい、夫れは自分が使ふものを擇ぶやうに、使はれるものも必ず使ふものを擇ぶであらふ、然し何事業にも十人十種

の人物を要する、恰も一個の膳部に各種の料理を按排するが如くである、然し腐敗したものは一も食ふことを許さない、腐敗人物を混へた事業は、何事業に依らず屹度失敗する。

岩下清周氏

昔し曾て東京高等商業學校の麒麟兒と稱されし同氏は、今大坂の銀行界に在て時に獅子吼を試みんとする、東本願寺の財產差押えを遣つたり、北濱を荒らしたりするので、頗ぶる物騷な漢子に數へられて居る、何を何と感ずつてか、此頃衆議院の一席を占め、切り口上で演說するのが恰も新聞の論說を讀む樣な心地がする、蓋し氏は一種のクセものである、機鋒才情兩つながら英發して那處にも隙きがない、力士ならば綠島と云つた樣な柄で

あらう。

◎現今の銀行屋は不得要領を以て最も要領を得たものとして居る、惟ふに僕の性格では何うも銀行屋にならない、然るに其れが銀行屋をして居るから可笑しい、何が失敗かと問はれたら銀行屋になつたが先づ失敗と答へる外はない。

◎僕は長く三井物産に居たのであるが、明治三十年に北濱銀行を創立してから之が經營に實際非常の苦心を拂つた、元來銀行其ものは僕の性格に反した仕事であつて、其上へ種々な方面から束縛されざるべからざる多くの塲合に觸接し、今に花々しい行動を取ることが出來ない樣になつて居る。

◎其外僕は營口水道の經營をもやつて居る、海外の仕事は漫然たる物好き屋の能くする所でない、是非國家的觀念でやらねばならぬ、口實を構えて國家に托辭するものと思はれては困る、僕等はソンな浮氣でやつて居るのでない彼地で一つ物になれば又二つも三つも物になる時があらう、其れが取も直さず國力の發展である、從つて是非成功させたいと思ふ。

◎僕は四十歳より五十歳までの人生大事の時代を銀行屋で暮したから、今後驥足をのぶるなど云ふとは到底六ケ敷からうと思ふ、凡そ何人を問はず、自己の性格に適せざる仕事の爲に面白からぬ月日を空過するほど愚なる事はない、其れを行つたら屹度失敗するか但し一生平凡に終るの外はない、僕は現に此愚なることを行つたのだ、自ら顧みて覺えず長吁短歎することがある。

岩原謙三氏

氏は梅ヶ谷式体格を社會に押出し、米國で鍛へ上げた腕前を以て三井物産の理事の椅子に坐はつて居る、事業上のことは兎に角社交上の失敗では恐らく他人に一歩も讓るまいと自稱するだけ、頃日も或宴席でぐでん〳〵となり、千鳥足での歸るさ、あたり近所の便所を捜したが中々見當らず、其中ち漸つと見付けて早速はぢき飛ばしてる眞最中、後ろでコラの一喝、驚いて振顧れば査公が睨み付けてゐる、便所と思ひしは豈に計らんや自動電話室にてありしなり、此れ位のことは氏にして有勝の失敗なりと云ふ。

◎何か財界に於る失敗談をとの御望みなれども、本來斯界の成功者にあらざる自分は、亦從て失敗談として價値ある御話の出來やう譯が無い、尤も個人としての失策談をとの御注文ならば何人にも退けは取るまい、併し折角の御尋ねゆへ、本職の貿易業に關する或る失敗談を簡單に御話致さう、事柄の生じた確かなる時日は今記憶しないが、多分明治三十一年上半季中であつたと思ふ、私が紐育で三井の仕事に從事して居つた時である、當時日本に於ける殆ど唯一の燐寸大製造たる製燧社と云ふのがあつた、是れが頻りに自分の製品を米國市場に賣込む工夫を凝して、私の方でも色々相談を受けた、米國は御承知の通り「ダイヤモンドマッチ」と云ふ斯業に於ては世界一の「トラスト」が蔓つて居つて、中々外國から持つて行つた燐寸、殊に日本のやうな初めて米國市場を試めさうといふやうな新しい物で商標の知られて居らない者では、迎も大した望の無いと云ふ事は凡そ見當が付て居つたけれども、何分取引先

の誠意を無下に排斥するのも氣の毒だと思つたから、一番彼の爲に力を盡し出來得るならば米國市場に雄飛せしむるやうにして遣りたいと云ふ心組で、製燧社の希望通り彼の送り荷即ち其數量三四百箱を引受けて賣擴めに努むることにした。

◎偖て品物が紐育に到着して第一に多くの見本を諸方の當業者に配付し、大々的吹聽をして賣捌に從事せんとしたる折柄、豈圖らんや商標侵害の廉を以て出し抜けに前述べた「ダイヤモンド」會社から訴訟を受けた、私は大に驚いて段々其訴訟の原因を取調べて見ると、此送り越したる燐寸の商標が悉く右ダイヤモンドの商標に酷似して居た、是に於て乎ソレ〳〵狀師の手を經て研究を盡した結果、進んで賣擴めることは絶對的不可能であると云ふ決論に歸着した、所が一々米國の製品に酷似したものを何故に積出したか甚だ不審に堪へない、之には屹度原因があるだらうと思ひ、電信をかけて調べて見ると、當時「レーナー」と云ふ西洋人が此商標を付して製造して吳れと製燧社に注文しながら、其後「レーナー」が迚も米國に賣る見込がないと云ふことを覺つて、之を積出さずに殘つて居つたものであると云ふことが分つた、其古物を我々が頂戴して賣擴めをしやうとしたのであるから、是れは怪しからぬ遣口であるけれども、製燧社も一向「レーナー」の奸手段を知らず、私の方は猶更ら知らなかつたのであるから奈何ともすることが出來なかつた。

◎さう云ふ譯であるから早速ダイヤモンド會社に申込んだが頑として應じない、一時は殆ど途方に暮れたが漸くの事で此燐寸を悉く双方立會の上で燒棄てる條件で和解が成就した、是れが日本であれば商標を張換えるとか何とか工夫をして眞逆燒棄てると云ふやうな大仕掛の事をせずに治りも付くのであるが、其處が凡て米國式であるから儲けることも大きい國柄であつて、人を罰する遣口も大仕掛なのである、それで愈々燒棄てると云ふ時に臨んで此品物を開函の上調べて見ると、殆ど皆な火の付かないものであつたから尙更驚いた、此燐寸は安全燐寸でなく黃燐燐寸で、而か

る梅雨中に製造したものを長らく日本の倉庫に置いてあつて、それから又三ケ月も掛る遠洋を航海して紐育へ到着したものであるから、此の如く腐蝕を生じたのである、それが折角太鼓を叩いて日本燐寸の賣擴めをして見やうと思つた事が、丸ッ切り水泡に歸して大數の荷物を態々米國迄持つて行つて棄てたと云ふが如き珍事を惹起した、是れが原因になつた譯でも無からうが其後餘り米國へ燐寸の輸出を計畫した人が無いやうに聞いて居る。

◎近來外國、殊に支那の滿洲地方に對して各種の粗雜なる雜貨が輸出せられ之が爲め折角の貿易を傷けて居るやうな事實がある、私は決して西洋人が日本の製造品を評する如く日本の製品は悉く見本より劣つて居るとは信じない否々常に日本製造家を辯護する側に立つて居る、併し外國貿易に從事し居る人々は、唯單に外國に對する輸出品の取扱を爲す丈けに止まらずして、日本に於ける各種の製造業に投資するなり、或は他の方法を以て監督するなりして、充分精良にして間違ないと鑑定が付いたものでなければ、迂濶に外國市場に賣捌くことは出來ない、國家百年の計として此點は大に警戒を要することゝ思ふ、而かも之と同時に日本の資本家が、貿易品の製造業に甚大の注意を拂ふことが目下の急務ではあるまいか、然り、急務であらうと信ずる。

青木正太郎氏

氏は温順い人である、口の利き振りや、其他の態度から見ても確かに夫れと察せられる、恐らく皮相の見かも知れぬが、氏が東京米穀取引所の理事長たる間は、片野前理事長の如き失策は必ず之れ無からん、一時曾て壯士の群に入つて政黨騒ぎなどもやつたと云ふが、定めて優さしい壯士であつたらう。

◎私の父は中々やかましやで、家は可なり裕福であつた、而して父はイツも私に對し、此儘百姓してゐろ、學問などすると家の雪隱へ入れぬぞと云はれた事を今でも記臆して居る、私の失敗の第一は、其時に學問せなかつたことです、學問さへして置けば今頃は最う些つと物になつて居たと思ふ。

◎私が曾て鄉里の相原から、八王子へ出る埼玉往還と云ふ新道を開いたことがある、此新道は五哩計に過ぎぬが、若し之を開かなければ交通は實に不便である、其當時私は村會及縣會議員を勤めてゐたから、其れに相應したゞけの小勢力を利用して該工事の進行を圖つて居た、然るに地方一部のものは、之が爲め舊道が廢れると云ふので異論が盛んに起つた、幸ひ異論を排して遂に之を決行し、今では大に便利を附近村民に供給して居る、併し意地づくでやつた御蔭に、一時少なからざる私費を投じ少からざる非難を被つた事がある。

◎私は早くから相場なるものを知つて居た、二十三年に相馬某が仲買を始めるに付て其番頭兼顧問と云ふ樣なこともして見た、而して廿七年には實にひ

どい目に逢はされた、ソレは丁度米倉一平氏が米穀取引所の理事をしてゐた時です、日清戰爭中の事とて輸送力缺乏の際、其れを見込んで同志數名と米の買占めをやつたのだ、見込は慥かに好かつた、然るに其年の十一月初旬に當切賣買停止の事ありしが爲め如何ともすることが出來なくなり、折柄賣方の方は郵船會社や政府筋に交渉して土佐丸を伏木へ向けて米を積ませにやつた、そこで買つた米の十萬石と云ふもの、すつかり現物を渡されて仕舞ひ、大に馬鹿を見た事がある。

◎横濱鐵道に關係して少からざる時間と勤勞と金其ものとを空費したのも、失敗と云はゞ云ふべきものである、廿七年五月に我々同志中より横濱八王子間の鐵道敷設を出願した、所が一日か二日の後に横濱の實業派が又同一の出願に及んだ、這は所謂市部派と稱するもので我等のは郡部派であつた、夫れに亦雨宮一派からも出願し、外に武州派の人達が高崎横濱間の連絡として同一の出願したから、都合四派の競爭となつたのだ、政府に於ても是を有望な線路と認め、是非官設にしやうと云ふので、時の鐵道局長松本總一郎氏は之を官に讓れと云ひ出した、サレド無償で讓る譯には行かぬと孰れも頑張つて之に應じない、然るに政府は同案を二回迄も議會に提出して未た通過せざる中に、端しなく政府は財政困難に陷り、遂に官設を思ひ止らざるべからざるに至つた、併し民間には中々許可されない、而して四派の爭ひは依然たりである、是に於て淺田德則氏其間に斡旋し、市部派郡部派及武州派を合して政府に肉薄したる結果、やつと卅九年に之が許可を受け、四十一年九月工事落成までの辛抱は實に一と通りでなかつた。

◎卅三年に米穀取引所から追出されたのは無論失敗です、此時は齋藤修一郎氏の理事長で、理事長も餘り怠けたから人望もなくつて自然辭職せざるべからざる破目となり、同時に私に對して君も辭して仕舞へと云ふので、詰り逐ひ出さるゝことになつた。

◎江之島電氣鐵道からも追出されたことがある、藤澤から極樂寺迄は私と某

工學士の二人にて建設經營し、夫れから先は雨宮氏のやつたものだが、此時分私に取て此種の仕事は始めてゞあるから、三年間無給で働き、工事は金の要る其都度〳〵株の拂込をさせて漸く仕上げた、而して其後少しく利益を見るに至て重役の改選となり、株主側ではあんなものを決して再選するなと云ふので全く私を追出して他のものに取代へてしまつた、三年間も無給で働いて苦心したに拘らず、辭する時に慰勞と云ふ名で、たつた五百圓とは聊か驚いた。

◎廿九年に鄉里八王子方面の有志家などが、私の承諾なきに衆議院議員候補者にかつぎ上げた、夫れから偶然其氣になり、自由黨と銘打て運動して見ると中々形勢がよく、當選受合と迄なつてゐたが、進歩黨と氣脈を通じてゐると云ふ疑ひを以て、自由黨本部は私と外九名のものを除名した、斯うなれば局面一變、優勢忽ち劣勢となつてトゞ落選の運命を招いた、併し其後に無所屬として名乘りを揚げ、兩度當選したが、今は政界と緣が無くなつて居る。

◎恩人とか先輩とか云ふものはない、が選擧の時に金に困つて雨宮氏の口利きで安田善次郎氏から借りたことがある、其他餘り多く人に厄介をかけない唯だ失敗しても何んでも、一たび了簡を定めた以上は、其方面に向て奮進すべく勵めて居る。

◎社交上の失敗に面白いことがある、彼の新宿將軍濱野君の宅へ招かれ、鴨を捕らせると云ふので名士が澤山集まつた、新橋などからも澤山の美形が來て居た所が網を鴨にかける途端に足踏すべらして洋服のまゝで堀の中へスポンと水烟立てゝ落込んだ、きまりの惡いこと此上もない、美形連はドツト笑ひ崩れる、イヤハヤ妙な喜劇であつた。

福澤桃介氏

福澤氏は寧ろ財界のイタヅラ者として、ユキマワシ屋として聞へて居る一種異なれる人物なり、昔し曾て福澤諭吉先生の令嬢ふさ子の方に見染められて婿養子と爲つたとやら、實際眉目清秀の好男兒である、且つ年の若いに似ず、總ての切り舞はし方がなか〳〵甘い、氏は實業家と云ふよりも政治家に近い素質に富んで居るらしい、農商務大臣位はやれるかも知れない四十そこ〳〵の年齢で、現今の地位を得たのは、單に福澤先生の婿なるが爲めのみにあらざるべし、蓋し氏には大なる前途がある、法螺を半分に聞いても可なりの抱負がある、好漢請ふ健在なれと云つて置かう、此に掲げし寫眞は、廿餘年前のものに屬し、今では斯んな紅顏の美少年でないとも併せて斷はつて置く。

◎僕の失敗は中々〳〵多い、がその中で、一擧天下を席捲しやう位に思つた、まるで夢のやうな失敗談がある、其れに付て失敗の端緒から話してかゝらう。

◎時は明治三十九年の十二月であつた、風邪の氣味で臥蓐して居ると、菊地武徳君が野間五造君を連れ立つて來て、何にか大金儲けがなからうかとの相談を受けた、野間君とは今は交際して居るが、その時初めて會つたのである其際僕は二君の問に對し、新に一の瓦斯會社を起さうと云ふ大略の目論見を話した。

◎是れより先き、門司の素封家たる大橋淡君より、門司市に瓦斯會社を設立するに就て相談された事がある、それで僕も出資者の一人となり、また東京

瓦斯會社一部の人をも語らひ、兎に角設立の運びを完了した。

◎大橋君が門司市から下附を受けた特許書の中に、瓦斯事業は市自ら經營せず、又他に對して道路の使用を許可せずと云ふが如き、被特許者の利益たるべき條項がチヤンと保證されてあつた。

◎僕はそれを見て、東京瓦斯にも以上の特許條項があるかどうかを調べて見ると、東京瓦斯は、初め市營の筈なりしを中途民間の事業に移したので、門司の如き特許命令を受けて居らない、僕是に於て東京瓦斯と對抗すべき新瓦斯會社を起すの餘地ありと信じ、如上菊地野間二君の來訪を幸ひとし、之が同意を促して愈よ創立運動に着手した。

◎今一つは其當時東京株式取引所の五十圓株が七百圓もして居た、扨はと思つて、其方面にも一つ新計畫を立てゝ見た。

◎ソレや此れやで木挽町の待合山口を本陣とし、先づ瓦斯會社に關して對市會策を案じ、市會の牛耳を執り居りし森久保作藏君等と結托して願書を出したのが、四十年の一月下旬、許可を受けたのが二月初旬、其間僅かに十日を出でぬやうに覺えて居る、此の時の發起人は都合十一人、資本金二千萬圓、一株二百圓、而して之が即ち千代田瓦斯會社と云ふのであつた。

◎取引所の方は貴衆兩院議員は勿論、政府部面の一角をも取込む必要があつたので、劇烈な運動を開始した、而して其名稱を中央取引所と名け、資本金四千萬圓、一株二百圓で總株數二十萬、辯護士の三宅碩夫君に總ての書類を作成して貰ひ、四十年一月に願書を提出した。

◎扨て右の兩會社設立に就て、勿論僕が發起人であるし、同時に大株主であるといふの故を以て、本陣の山口に頑張つて居ると、時の貴衆兩院の連中が夫れ〳〵我が幹部員に連れられて、所謂權利株を貰ひに來る、僕は辭令書を交付するといふ格で、五十株、百株と人に應じて、書いたものを渡す、その內容は、成功の上は幾株差上可申候也といふのであつた。

◎ソンな譯合で、權利株を出した數は、殆ど十萬株、金額で二千萬圓近かつ

た、日本開闢以來二千萬圓といふ多額な買收費を投せんとしたのは、恐らく他に類例があるまい。

◎大した肩書のある連中が、一株二百圓として百株二萬圓、福澤さん有りがたうと來るだらう、宜い加減自惚の強い僕だ、得意思ふべしでないか、實際此時ばかりは、天下何事か成らざらんやの感を起し、一つ福澤內閣を建設せうと思つた位である。

◎右の如く秘密な行動が成功して、瓦斯會社は許可を受けた、取引所の方も將に許可されんとした、然るに例の有名な郡制廢止問題のために黨界に大波瀾を生じ、議員諸君は其問題に引張り廻され、政友會と非政友派とが大喧嘩をすると云ふ有樣で、僕等の方の問題は顧みられない事になつた、而して願書の如きも有耶無耶の間に葬られて仕舞つた。

◎中央取引所は以上の狀態であつた、千代田瓦斯の方は許可を受けてあるので、創めれば何時でも始められたが、丁度その時は諸株暴落時代なりしが爲め、後ちの形勢を見定めるまで差控える事になり、今も其儘になつて居る。

◎右の失敗談は、無關係者から單純なる問題と看做さるゝであらうが、關係者たる僕などは、實際一躍して千萬圓位の大富豪たり得べき空想に耽つて居たのである。

◎此の失敗談に就て別に後進者の鑑戒となるべき點も發見しないが、腐敗し切つたと云はるゝ政治屋連の良心の未だ全く麻痺せざる或る一點だけは慥に認めた、僕は前にも云つた通り、金是れ權で、政治家なり何んなりを金其もので自由自在に殺活し得べく考へて居たのに、スハ一黨の大事となると、金儲けを放擲する黨人の行動を寧ろ賛揚せずに居られない。

◎僕は恩人先輩といふものはない、狷介な僕には、先輩は先輩でも兎角氣に食はないのが多い、故に何事を計畫するにも、氣に合つた同意の間で話を進めて行く、それが果してよいか惡るいかは疑問であるが、僕は唯だ其信ずる通り實行して居る。

早川鉄治氏

氏は財界に於る一の注意人物なり、ナカ〳〵活力辣腕、人物と思はれぬ、生き〳〵した元氣をデブ〳〵した頭体に包んで其れを到る處に押廻し、大風呂敷を擴げ怪氣焔を吐ては腑甲斐なき今の實業家を吹捲くらんずる勢ひ凄まじとも凄まじ、今に見給へ吾輩は屹度天下を取て見せると力む所など、全く罪のない漢子である。

◎吾輩は卅一年に官を辭したが辭職前の大隈内閣に於て行政整理と云ふのはナカ〳〵以て役人あがりの八釜しい問題であつたのだ、而して其當時伯は吾輩に旨く整理案を立てゝ呉れとの事で、伯の知遇を得てゐた吾輩は、早速承知して腕の續く限りやつて見た、而して見事に出來上つた、然るに時の内閣は一体不人望なりしが爲め間もなく瓦解し、吾輩折角の功名も煙の如く消へてしまつた、若し之が伊藤内閣の行政整理をやつたとすれば、今頃男爵位は當然だ、考へて見給へ、屁の樣な條約一つ締結してすぐ男爵を貰はれる世の中ではないか、可笑しな話しだ哩。

◎官を罷めて政治界に飛込まうとしたが進歩黨も自由黨も厭やである、今に義理ある大隈伯でも死ねばそろ〳〵首を出すつもりだ、正直に言へば伯の死ぬのを侍つてゐるのじや、所が生憎伯は百二十五迄生きると云ふから困つた然し吾輩も百二十五迄生きるから結局伯が死んだ後でも活動する餘地のある勘定だ。

◎三十九年に東京電燈五百萬圓の社債を引受けて失敗した、是は其始め興業

銀行が引受けたいと申込んで出來なかつたのを吾輩が引受けたのだ、其處へ添田壽一君が遣つて來て信托させて呉れと云ふ話しである、吾輩も男だ、其れでは一番君の顏を立てゝやらうと云ふので、吾輩の方で出來てる倫敦の資本家に其旨を云ふてやると然らば興業銀行に信托させると云ふのであつた、仍で添田君の方へ金主やら利率やらを話すと、其金主なら此方でも知つて居ると云ふ樣な工合、其間にまづいことがあつて此の交渉は終におじやんになり、吾輩は餘計な電報料を數千圓棒に振つてソレでお仕舞とは聊か情けなかつた。

◎戰後事業熱の熾んなとき大分新會社に關係して十四五萬圓も摺つてしまつた、小樽木材、帝國肥料、共同電燈、中央製煉所等廿餘會社の發起人となつた所が今では小樽木材が殘つてゐる計り、外のものは悉皆合併やら解散やらで何にもならずに仕舞つた。

◎吾輩の失敗するのは何時でも武士氣質を出して、然諾を重んじ過るからである、新會社勃興の時でも、普通の人の樣に拂込もせず權利賣買でもすれば損ごころではない儲かつてゐたに違ひない、吾輩は正直に拂込んだものだから、今でも空ら株をウント背負ひ込んである樣な仕末である。

◎失敗と云へば今日が先づ失敗の極度にして、眞逆是れ以上失敗することはなからうと思ふ、前に述た失敗の新會社も、局に當るものが官吏上りの人なれば惡いこともすまいと云ふので、多く之に任して置いたのが不成績の一原因を爲したのだ、然るに役人上りは勇氣がなさ過る、少くとも事業家となるには勇氣が要る、勇氣がない爲に營業費だの臨時費だのに少しでも困ると金を融通することが出來ない、手形の裏書も思ひきつて出來ないものが多い、併し結局に至て吾輩は矢張り官吏上りの實業家を稱揚する方だ、どうも這い上り實業家は兎角惡いことをしたがつて困る、大會社を經營しやうと云ふ腕のあるものは大抵官吏上りである、澁澤中野近藤を始めとし、日銀の高橋、興銀の添田、勸銀の高橋其他松尾柳生、南滿の中村、商船の中橋、電鐵の牟

田口の如き皆官吏上りでないか。

◎吾輩は故松本總一郎氏を唯々恩人として居る、十四歳の時から氏の許に厄介となり、山尾子爵の世話で官吏になつたのだ、故榎本子在官中には稍や重用されて何でも早川でなければいかなかつた時代もある、所が實業界に身を委する樣になつたのは其間自ら多少の曲折あるを免れない、「官途盡る處是れ青山」此上財界で失敗を重ねたなら、更にドンな風に變化するか、ソコは天秘漏すべからずである。

小野金六氏

氏の態度は傲慢に似て傲慢ならず、飄逸に似て飄逸ならず、氏自らの保證する所に依れば十年以前はイザ知らず、今日では品行方正であるとの事だ果して然るや否やを知らず、氏は朗々たる音吐を以て頻りと氣焰を吐きたがる、ダガ話中常に微笑を湛へて對手を引付けんとする一種の表情に富んでゐる、而かも高笑する毎に屹度煙草を吸ふ、其煙草たるや刻煙草であると附言して置く、氏の壯年時代には、食鹽で失敗し製絲で失敗し、其他失

敗つゞけであつたが、西南役の前後から今の地位を得たらしい。

◎自分は是迄一時に種々な事業に手を出して失敗した、此數種の事業に手を出すと云ふ事が總て禍敗の原因である、一つしかない腦髓を四方八方に使ひ分けするから、仕舞にやりきれなくなるのです。

◎失敗し若くは失敗せんとする他人の事業を引受け、どうにか目鼻を付けた例は少くない、此等病的事業を繼承して健康體に回復させた時の愉快は何とも言はれない、只今關係してゐる事業の中で、卅二年に煉炭株式會社を引受け、卅五年には東京機械製造株式會社を引受け、富士製紙株式會社は四十一年に引受けた、而して皆孰れも當年の衰運を挽回させた積りである、前社長の失敗を話せと云ふのはヒドイ、死屍に鞭つ樣なものであるから、其れは止めて置きませう。

◎私は二十歳で東京に出で、今年五十八歳になる迄、三十七八年間色々な事業に關係した、其中で明治二十年にペリユー殖民會社發起の一人と爲り、本社を東京に置いたが、今の日銀副總裁たる高橋是清君などは有力な發起人の一人であつたのだ、然るに當時我國庫に銀準備が甚だ不足して居た、是に於てか中途にして殖民會社の目的を變更し、ペリユーのカラワクラ銀鑛を採掘すべき企てを起して、技師職工勞働者を渡航せしめ、愈よ實行し掛けて見たのである、所が案外にも鑛脈は十間か二十間計りで盡きて仕舞ひ、後は頗るまづい、而して此事業は數十萬圓の損失でおヂヤンと爲つた、若し初めの殖民事業を中止せずして、其れを專門にやつたならば或は成功したかも知れない、然るに充分の試掘もせず、唯だお祭り騷ぎをやつたので、遂に馬鹿を見るの已むを得ざるに至つた。

◎臺灣鐵道にも二十八年末に發起者の一人と爲り、經營頗る困難を極めし折柄、ソレが官業と成てヤット安心した事もある。

◎三十八年に德島縣の或る鑛區を調査に行つた、鑛區は四國の中央なる、劍山組谷方面別子銅山の續き合にて、含銅硫化鐵に富んで居る、尙ほ精査しや

うと思ふて昨年も行つて見た、其結果東京に阿波探鑛株式會社と云ふのを設けて五萬圓計り注ぎ込んだが、何しろ交通運搬の便を缺き、之を開くが爲め一寸百萬圓から要るので、今も夫れなりになつて居る、コレも失敗と云へば失敗に違ひない、併し將來銅價の上騰するとき、必ず此の鑛業をやるつもりである。

神谷傳兵衛氏

氏が禿げた頭の薄毛を凡帳面に撫で上げ、木綿立縞の袴を着けて安樂椅子に凭り、机に向つて事務を執つて居る所は、昔からの働きものであること が一と目でソレと知らる、偶々彼がニヤリ〳〵笑ふ所などは、浮世を面でかゝつて居るとも見える、當年取つて五十四だと云ふから未だ老人とも云へない。

◎私の家は代々士であつたが、自分は士が嫌ひで九歳の時、どうかして酒を

造つて見たいと思ひ、そこで子供心に酒の大樽を作る桶屋の小僧になれば酒を作ることが判ると思つて早速桶屋の小僧になつた、然るに竹割をさせらるゝ計りて酒藏の中へは入れて呉れない、仕方がないから其處を逃げ出して尾張の姉の家へ居候となつて酒造家へ奉公口を捜して居た。

◎其中に金を儲けやうと思つて十三歳の時に始めて米相場をやつて見た、所が中々面白い、少しづゝ儲かつたものだから續けてやつてゐると、今度はウンと損をした、此損の爲に身の置き處がなくなり、伊勢方面へ逃げ出した事がある。

◎十九歳に始めて横濱へ出て、矢張り相場に力を入れて一時トン〳〵拍子に巨利を博し、之が爲め全く有頂天になつてゐた、然るに柳の下に何時も鰌は居ない、變轉窮りなき相場界の常事として、又忽ちにスッテン〳〵の丸裸となつてしまつた、もう相場はよした、到底碌なことはない、地味な商賣に有り付かねば仕舞にはひどい目に遇ふと一念發起して、甘歳の時に東京へ乘り込んだのです。

◎東京では只今の住居地へ最初に落付いて濁酒の製造に着手せんとしたが扨て資本がない、貸して呉れる人もない、仕方がないから、衣類だの少しの道具を悉皆賣り拂つて七十圓の金を拵へた、其時に殘つたものは俗にもじり絆纏と云ふめくら縞の筒袖一枚であつた、此絆纏こそ家の寶である。

◎右の次第だから恩人も先輩もない後援者もない、只開業の時に三河屋と書いた日除暖簾一枚と行燈を呉れた人があつた計り、今でも行燈を座敷に置いてある、家内の者には私が頭の上がらぬのは此行燈計りだと始終教へてゐる。

◎家内を娶るときに失敗した、或る人の勸めに任せて未來の妻を見に行つた其時の事、私は濁酒のとばつちりの着いた穢ない絆纏を着て、兄は士である から紋附羽織など着て一所に行つた、所が妻となるべき女は、どちらが婿様かと疑ひ始め、私だと聞いてから、とてもあれではと御免を被られて仕舞つた。

◎專門の酒造に付ては大した失敗もなく今日迄進んで來たが、明治二十九年に越後長岡の日本石油精製株式會社と云ふ五十萬の會社があつて、其株を二百持つ樣なことになり、三十四年頃重役に選ばれた、全体此會社の事業は無茶であつた、一つだつて石油礦を持たずに、輸送船などを造り、十八萬圓の拂込資本を食ひ盡して、其お餘りの負債を私し一人に押付けられたには少からず閉口した。

◎ダガぢつと辛抱して着々之を整理し、結局敗を轉じて勝と爲すを得、爾後富士石油會社、東山共同組合、中外石油組合などの礦區を合して二百萬圓の會社とした、コレが昨年六月寶田石油と合併したのです。

◎私は失敗に對して何時も辛抱する位結構なことはない又私の酒造主義は畑の利用である、畑を利用することは最も我國情に適してゐる、つまり畑の作物は金で、田の作物は銀である、酒なども畑の作物がよい、材料は安くて且つ造り込んだ後で置けば置くほど善くなる、米から作つたものは二年位しか持たない、又畑ならば少々山地でも開墾して利用することは造作もない仕事だ。

◎來年は酒税が上ると云つて、今年ウンと造り込むことは一般の人情なれども、這は失敗の甚しいものである、私なども始めは御多分に漏れなかつたが此頃はソンな場合に決して澤山造らない事にして居る、税の上る前にウンと造つた酒は增税後の直段では賣れない、造石高が多ければ腐りも多い、其中に嗜好が進むから安い酒は買はなくなる、今でも高い酒は拂底で安いのはドッサリあるから皆持て剩してゐる、酒造家須らくコ、の道理を知らざるべからずだ。

大橋新太郎氏

南海の南北海の北、三家村の隅の隅まで、所謂博文館ものゝ行渉らざる所やある、淺くして廣き博文館の出版物が、如何に地方文運に貢獻せしやは今更絮說の要なかるべし、而して父佐平氏の後を承け、之が館主たりしは即ち新太郎氏其人なり。

現在の立場に於て、氏は唯だ出版界の泰斗たるのみではない、中央財界に在ても亦閑却すべからざる一人と爲つて居る、敏顯餘り有て德器割合に大ならずとの批難もある、併し那處を見ても完人は少いのだ、要するに氏の如きは先づ以て好個の紳商と云ふべしだ。

◎一回頭して過去を顧みると、若しアノ時にアーもしたらばと今更遺憾を感ずる事が多い、仕事最中には、理想上成功疑ひなしと信じてやるのであるが扱て事の成行きに於て、經驗の敎ゆる所は兎角理想に反し易いのだ、這は蓋し自分一人の所感であるまいと思ふ。

◎日露戰後の新事業勃興時代に於て、自分も或る新計畫を實行して見て失敗した一人である、惟ふに戰後新事業の企てらるゝは、獨り我國のみではなく各國概ね轍を一にして居る、而して其れが各種の進步を促す誘因と爲り、强ち咎むべき事ではない、併し熱中した時には勢ひ誤算の生ずるを免れぬ。

◎自分の失敗と云ふのは、日露戰後支那に向て出版業を創めた爲である、元來支那には讀書人といふ一の階級があり、之と同時に不讀書人の階級もあるべき筈なり、然るに讀書人〳〵と云ふので支那人は概して讀書生であるかの

如く誤想したから可笑しい、支那は御承知の通り普通教育の普及せざる所である、今日冷靜に考へて見ると、損をする事が解り切つて居るのになせ損をする仕事を熱心にやつたかと思ふと、實に不思議に堪へない、やはり戰後の企業熱に浮かされて居たのであらう。

◎自分共は一の東亞公司なるものを興して支那貿易に着手し、今日では可なりの商賣高だが、コレも最初は頗ぶる悲觀すべき狀態にあつたのだ、自分の失敗したのは此の東亞公司でなく、獨力出版業をやつたからである、自ら中華と稱するほどの支那、世界人口の五分一を有する支那、同文同種の國、何れを見ても出版業には持つて來いだが、何が扱て行つて見ると着々失敗だ、運輸上の大不便がある、不讀書人が多い、成るほど失敗する筈である。

梅浦精一氏

氏は長身痩軀、弱きこと衣に禁えざるの風がある、久しく肺患に惱まさるゝは氣の毒千萬なり、自分も失敗談を聞かれるやうになりては、餘命長からずかねと苦笑一番しながら、其語る所おのづと活力を缺いて居る、最早雄々しき當年の武者振を今後に見ることは出來まい、左れど當分死さうもない、蓋し浮き世に未だ多少の未練もあらう、兎角は心靜かに療養し玉へと曰はまくのみ。

◎自分の家は世々醫者である、それで自分も醫師になる目的を以て十六歳のとき鄕里越後より上京し、石井研堂氏の塾生となつた、時は明治元年恰も今上陛下御遷都の際なりき。

◎本鄕駒込の西善寺に假居せしとき、東京珍らしさに森川町通りでボンヤリ手品使を見て居て、虎の子の五十兩を掏り取られたこともあり、其後學資を取りに一旦歸國して再び上京するとき碓氷峠で所謂ゴマの輩と稱するものに引かゝり、兩掛を持ち逃げされたなども小失敗の一つであらう。

◎明治二年に日本橋芽場町の溝部といふ醫家に入塾した、此の時代の同輩は今の醫界に何れも大先生と稱されて居る、自分も若し醫界を去らざりしならば大先生株の一人であつたかも知れない、併し自分の性質は元來醫者向きでなかつたのだ、之が爲に中途醫學を廢し、更に箕作秋坪先生の英學塾に第一期生として入學し、後ちには尺振八先生の英學塾に轉校した。

◎既にして大藏省紙幣寮の屬官となり、又新潟英語學校の敎頭などして明治八年內務省に轉じ、翌九年同省から茶及びインチゴ等の取調にとて印度に出張を命ぜられたは好いが、其際實に大遺憾な事をした。

◎其遺憾と云ふのは、印度出張中、商務視察上必要と認むる場合は、何方へ行つても宜しいと命令を受けながら、命令の眞意は實際自分の宿願たりし歐州留學の志望を滿足さして呉れる意味なりしを、自分は印度內に於ける事なるべしと誤解し、翌十年六月まで印度內地の各方面を視察して歸朝した、出省して見ると何處から歸つたかとの話しである、扨はと氣付いたときには既に遲蒔に屬し、實に限りなきの恨を遺した。

◎十二年東京商業會議所創立の際、入て書記長となつたが、抑々足を實業界に投ずるに至つた第一歩である、扨て愈々實業界の人となつて見れば、兎角に失敗は多い、が特に之が失敗談なりとして吹聽するほど價値のある話もない。

◎三十一年肺結核に罹り、越えて三十五年澁澤男爵渡歐の際一切の塵務を棄

て、自分も同行する事にした、此時自分は旅行先きで死の運命を招くに至るべしと覺悟し、遺言狀を妻に渡して行つたが、自然的大海の空氣療法とでも云ふのであらう、不思議にも肺の潰瘍部が大半快癒し、今以て餘生を持續してゐる、併し今後責任ある仕事は恐らく出來まい。

皆川四郎氏

未だ頽唐せる老境に入りしにあらず、五十には尚ほ多少の距離あるべし、去年來、直腸癌とか云ふ恐ろしき重患に罹り、一代の大醫某々氏等より、到底枯骨再肉の望みなしと宣告されしに關せず、近時不思議に其れが輕快の境に近づきつゝある由なり、彼れ曾てウンと才名を都門に謠はれし漢子なり、併し才の奇よりも骨の奇よりも、彼れの運命や寧ろ更に大に奇なるものではあるまい歟。

或は代言人と爲り、或は警部長と爲り、銀行屋たりし事もあれば會社の創立者若くは經營者たりし事もある、面白半分にたしか議員として衆議院にも列した筈なり、株式で大に瓦落を喰つた例しもあらう、成敗常なくして萬疊の波瀾は絶へず其身邊に渦まいて居たのである、彼れ自らは渾身悉く失敗の結晶体だと慨歎しては居たれど、唯た〳〵薄倖を長吁短歎するに止るほど氣弱い漢子でない、現在ヤット一死を免れしのみなる病軀にてありながら、一味俊邁の氣依然として猶ほ且つ眉宇の間に溢れて居る、ナカ〳〵以て老境病餘の人とは受取れない、否彼れの面上には、案外新企望が輝やいて居るかの如くに見えた、強弩の末勢なんぞと敢て惡る口はたゝくまい、當年の才情機鋒及び辯力も恙なく存在して居るダガ運命を制し損ねて兎角運命に弄されし傾向あるを免れない。

彼れの應接室に、山陽のと室鳩巣の小幅ものを懸けてあるのを瞥見した、『孔子猶龍老子猶魚』とか云ふ文字が山陽のに在つたと記臆する、扨て是の應接室に、襠袍を裾長に着て黒縮の羽織を纏つた伊達寛濶らしい一個の哥々とも見れば見らるべき、其人其れが即ち主人公の皆川氏である、應て客間に對する彼れの失敗談なるものは、辯舌に由り、大要下の如く耳に響いた。

◎「牛を殺そか代言しようか」と云つた時代の事である、當時の代言人即ち今の辯護士を業として、予は實に少からさる收入を得、人一倍の贅も言つて見豪奢も極めて見た、其時分年は二十を少し越したばかり、若々しい代りに總てが生き〳〵して居たのは勿論言ふまでもない、ヤレ地所を買へのヤレ公債を買へのと勸めて吳れた人も澤山あつたのだ、然るに金はイツも他人が持つて來るものと相場を極めて居た、起さうとしても客な料簡の起らう筈はない信州の田舍ではあるが、檀那樣と云はるゝ可なり分限ある家の長男に生れた爲め、一種の樂天觀が總てを支配して居たと見へる、マカリ間違へば田舍へ引込むだけの話だ、我に二頃の田あり、此の膝安んぞ屈すべけんやの意氣が

ナカ〳〵旺んであつた、從つて金錢問題に淡泊にして功名問題を只管唯一の標的として居たのである。

◎扨イクラ世間を丸呑にしても、其實其時代に代言人の地位の低かつたことは、明白之を疑ふの餘地がない、一と口に代言人と云へば、公事師同樣に看做されて居たであらう、是に於て苦情は先づ父の方から起つて來た、是非役人になれと云ふ請求に幾度となく接したのだ、無論其當時は大の官尊民卑であつた、役人が馬鹿に幅を利かした時である、左ればなり、是の一種の動機に由て境涯を警部長に一轉した、代言人が突然警部長になるなどゝ云ふことは頗ぶる異數として一般に持て囃された時代もあつたのだ、今更可笑しくはあれど、其れが其時の普通的觀念なりしと公言するを憚らない、扨て予が失敗の第一歩は、抑々是の警部長時代に始まつた。

◎予は實に刑事辯護なるものゝ皮切りを遣つて見た、而かもソレを置土産にして官吏社會に飛び込んだ、其れがたしか廿九歳の時だと覺えて居る、其時の同僚にして、今既に國務大臣の印綬を帶び、堂々臺閣に出入する輩もある夢ぢやゝ、其後二十年の夢は隨分短くない。

◎大野誠と云へる長野縣令ありしを記憶し居る人あらん、大野は東京での予が遊び仲間の一人なりき、トコロで其大野が即ち縣令にして予は同縣の警部長を拜命した、相識ること既に深し、從つて衝突の有らう筈なく、物の總てが圓滿に運ぶべき道理である、然るにイツとなく兩人の間に鎗の突ツ張りが始まつた、元氣滿々たる予の眼中に、僅か一二等位ゐに過ぎざる階級の差等を認めて居なかつた爲めであらう、何んだ糞忌々しい、面白くもないと思つたが最後、功名を官途に求むるの非なるを悟り、桃花流水杳然一去して、官祿に衣食することは此時より全く斷念した。

◎既にして第一銀行に入り、一時澁澤の秘書役然たることをして、間もなく石卷支店長に轉じて行つた、是の支店長時代こそ、全生涯を通じて最も平凡な時代、最も氣樂な時代であつたかも知れない、首を回せば、同支店支配人と

なり、赴任早々一大失敗を演じたことがある、其れは當時澁澤頭取が東北各支店巡視の序に、予の支配人披露會を仙臺の某旗亭に開き、主賓として時の知事を始め書記官警部長收稅長其他各課長等を邀へた、宴酣にして知事某君ツト未座の予の前に來り、抔を屬して君は何故に警部長を辭して銀行者となられたかと質問ゆへ、予は直に長野縣の芋掘平民にては先以て知事位が出世のドン詰りと思ふから罷めたと答へた、之れを聽くや知事君は憤然とする、是れは失策りたりなと氣が付たが最早上げも下げもならぬ、翌早朝頭取より直ぐ來いとの使ひ、偖はおいでだなと早速行つて見ると、果して頭取には最と嚴格なる口調を以て、昨夜宴席に於ける足下の擧動は一に商人たるの態度に適せず、足下の頭りは金平糖に似て角々で出來て居る、斯る人物は到底支配人たる資格なし、多く言ふを要せず、速に歸京せよと言渡された、幸ひ詫言してくれた人があり、漸つと留任の許可を得たが、役人上りの商人にはこんな失敗は澤山あると思ふ。

◎たしか廿年なりしと記憶す、九州鐵道創立大會愈よ福岡に開かれんとするに際し、或る筋の内相談を受け、一面新社長たるべき高橋新吉氏を補佐すると共に、福岡熊本佐賀長崎四縣の株主間に起れる物論取鎭め役として、顧問名義の下に九州指して乘込んだ、將來副社長にとの話もあり、實際腹の中では、蛟龍池中のものならんや位の自信を持つて居た、扨て愈々東京大坂の大株主及び其他大有力者の後援を負ひ、前途の榮達を夢想しつゝ大會の陣頭に臨んで見ると、所謂九州男兒と稱する連中が、算盤を度外にした三角線速成論などを擔ぎ出して席上を騷がすことが夥しい、中に高橋君を嫌忌する向きもあり、又極力予を排斥せんとする輩もあり、殊に予の身邊に肉薄し來つた其權幕は唯だ凄まじいと云ふの外はなかつた、曰く皆川は澁澤大倉藤田等の間諜である、彼れの來るや實に工事其ものを大倉組一手に奪はん爲めなりと、斯んな途方途轍もないことを言ひ觸らされて一時隨分閉口した。

◎議長たりし高橋君は、大會二三日目に席を佐賀の牛島氏に讓り、同時に行

李を纏めて歸京しかけた事もある、思尺黑闇々たる眼前の形勢に看て、コレではとても駄目だと前途を悲觀したからの事であらう、併しどうやら其れを引き留め、一週間以上を費して仍ほ議案の第一項をすら議了すること能はざるほど紛亂淆亂せる狀態の下に大會を續けて居た、無用の質問無用の建議は幾日經ても矢張り右の九州男兒側から續出する、然れども決を採ればイツも勝利は株の多數を代表する予等の手に歸するのである、是に於て男兒組の三十幾人かは、理由なき憤慨を並べて一同席を蹴立てゝ去つた、斯うなれば一瀉千里、跡の一日で大縺れに縺れた創立大會を纏めた事がある。

◎コレだけならば敢て失敗談とは云はれない、然るに佐賀熊本の男兒組は、事後ます〳〵予に對する惡感を昂め、自然之が爲め會社全體に累する恐れがある、其時石卷で溜めた小金も何も使つて仕舞ひ、榮達の夢も一朝に破れ果てゝ遂に同社との關繫を絶つに至つた。

◎東京電燈會社の紊亂時代に入て、之が支配人と爲り、整理時代擴張時代を經て其後株式場裡に意外の巨利を占めたともある、時價八十五圓位の電燈株が、甲州勢に買煽られて一躍百圓以上の高直を示したから、儲けたくなくても儲かつた譯合です、當時其勢ひで歐羅巴廻りをして來いと勸めて吳れた人もある、サレド乃公の希望は、此の機會に於て大に有望の諸株を買入れ、第一流の會社に於る第一流の重役たるべき素地を作り、以て財界有力の槓杆たらんとするに在つたのだ、安ぞ知らん、此時危機は既に脚下に迫り居たのだ忽ちにして廿九年の瓦落を食ひ、從前占め得たる一切の利益を吐き出したるに止らず、更に大々的手疵を負ふの已むを得ざるに至つた、天測るべからずして或は測るべし、測るべくして測るべからざるは人事の變態なり、扨も偖もと云ふの外はない。

◎官海にも政界にも成功せず、財界でも同じく失敗者では、聊か先祖に申譯ない心地もする、併し客臭い今の紳士仲間に入るの榮を得たくもない、彼の石定等の俠客連は、今の紳士仲間に比して寧ろ大に語るべき點があつたと思

ふ。

◎向上主義大に可なりと雖も、向上主義に焦り過ぎしが予が失敗の總ての禍根なりしを疑はない、石の上にも三年とやら云ふ諺あり、何事もじつと辛抱して、おのづからなる機宜時會の熟するを待つのが、寧ろ常人の履むべき常軌なるべきを信じ、子弟を會する毎に、往々是の意味の說法を聞かして居る

立川勇次郎氏

氏は理窟屋の辯護士より實業界に轉籍せし人なり、前年雨敬氏と提携して東鐵の三錢均一を主張せる其當時の意氣と云ひ口氣と云ひ、髯髭として辯護士の俤が殘てる、語調明晰にして且つ生氣に富んで居る、烟たる眼光も尋常ではない、どうやら只の鼠でないらしい。

◎私は少時法律を研究して代言人の資格を得たので、田舍に居るとき、本業の傍ら英語の教員をしてゐた、が是れ位のことでは面白くないから一つ東京

でやつて見やうと思ひ、妻子を連れて廿五歳の時に出て來た、所がお江戸には博士もゐれば學士も澤山居る、迚も我等の企及すべきではない、扨てはと思つてそこで實業界に身を投ずべく決心の臍を定めた。

◎實業界に入るにも中々一寸では行かぬ、辯護士の看板を掲げて衣食住の心配ない樣にして置いた、併し夢は常に實業方面に飛んで居る、所で廿二年に始めて一事業を起すべき動機を捉へ、元日本銀行理事及日就社々長などをして居た小安峻氏と二人で炭礦事業を始めかけた。

◎其炭山は筑前遠賀郡楠橋炭礦と云ふので、廿二年より四年までは仕事も無事に進み利益もあつた、私は此事業の爲め平生礦山に詰め切り、大に精力を注いだにも拘はらず、廿五年に至つて一蹶振はず、端なく失敗の運命に際會した。

◎廿五年は御承知の通り炭價に激變を來したときである、門司上海香港ごこでも賣れ口のない石炭が山をなしてゐる、斯樣な譯合であるから値段は從來の半額以下に下落した、此時に若し私が實業界の經驗ありしならば、或は應急の處置を取つて失敗の量を減じ得たかも知れない、然るに何分始めての仕事であるから機敏な行動に出ることが出來なかつた。

◎斯く下落したときには、事業を緊縮して費用を節し、極く小さくして價の回復する迄我慢してじつと維持する外はない、然るを私はこんな骨合を知らない爲め、困つたなア位で構へ込んでゐた結果として、遂に工夫に拂ふべき賃金の出所をすら失ひ、折角儲けた金も悉く吐き出して仕舞ひ、全くの赤裸々になり、夫れで廿六年には此礦山を暗み〳〵人手に渡した、元來石炭位ゐ價格の高低の激しいものはない、從つて奇利を博する事もあり又ウンと損することもある、夫れも少ない量のものなら始末も仕よいが、山の如き石炭と來ては、賣口のない時實際其始末に窮する。

◎三菱の如きは、炭價の下落と見て取るや直ぐに事業を縮め、工夫等に相當の手當を給して一時之を解き、停滯してゐる品は下落中少しも賣らない、只

時節を待つて居る、其中に値が出て來る、其時に始めて賣り出すから大抵は一定の相場で品が捌けるのだ、彼等は下落中を維持する丈の資力を持つてゐるからでもあるが、伸縮自在な所は遖に旨いものです。

◎楠橋炭礦で失敗したのは、相場の下落中を維持するだけの資金を缺きしも之が一因なれども、要するに事業緊縮の應急手段を取らなかつた爲めである本來炭礦には大抵見込より一倍位の資本が要る、十萬圓でやるとすれば、更に十萬圓の準備を必要とする、然らずんば相場の下落に遇ひ、忽ち一頓挫するを免れない。

◎失敗以外に若し面白いことを云へば、確か二十三四年頃であつた、奥州會津に元と愛林社と云ふて五郡に亘つた一種の講があつた、是れは山林や原野を講其ものゝ金で買求め、百姓共均等の權利を得て、皆自分の物と思ふて、伐木開墾して來りしを、其講株が大下落せる場合に際し、此株を或人が買はぬかと勸めて呉れた、這は面白いと二人計りで會津地方の郡役所村役場で聞いたら實際山林も原野もある、そこで一株五圓位で全体の七分程買ひ占め、會津で遂に解散の決議をして財産の分配をした、何でも此時一株六十圓位の配當であつたと思ふ、妙なとも世間にはあるものです。

◎此外に私の關係した事業は大抵電氣に關するものゝみであるから失敗は極く少ない、泡沫會社の勃興したときなども少しも手を出さなかつた、又私は痩せても枯れても獨立獨歩である、實業家に依頼心があつては到底成功するものでない。

◎恩人とか先輩とか云ふ人もない、ダガ何時でも意見が合つて進退を共にしてゐるのは雨宮敬次郎、藤岡市助の兩氏です。

根津嘉一郎氏

氏は峽中實業家の重もなる一人なり、一夜造りの成金にあらずして父祖傳來の資產家なり、併し江戸の眞ン中に根津の名を謠はしむるに至りしは、全く氏が獨自一已の力である、若し風采上から云へば、彼れが有名なる根津君かと疑ふものがあらう、然も十二三會社に大株主とか重役とかの地位を占め、一面株式にも手を擴め、胴慾に衆議院議員の椅子をも放さない、お負けに多少の艶福もあるらしい、蓋し一個の名物漢と云ふべしダ。

◎私は金を儲けた樣に世間から言はれるのが可笑しい、實は親讓りの財產である、此財產を繼承したのだから不思議はない、思慮分別の付く迄は隨分放蕩した、放蕩の方では親方になれさうなものだ、勘當された位のことは屁とも思はなかつた。

◎明治二十九年頃何株によらず買つて居たことがある、始めの中は一切賣らずに唯銀行へ預けつ放しにして置くと三十一年に至つて諸株の大暴落に出會した、此時は八十萬圓近い損失を來した。

◎當時岩崎彌之助氏が日本銀行總裁の職に就き、其意見で諸株の擔保價格をぐつと引上げた、郵船株の如きも六十圓位から三十圓位迄に下げたから堪まらない、私もすつかり參つてしまつた。

◎其頃の財界は今の樣に大きくなし、郵船株は第三番目の大株主であつた、而して會社は資本八百八十萬圓、全財產少くも二千萬圓以上に達し、收益夥きに拘はらず、一割位の配當しかない、故に

株主中より重役改選論者が出て來た樣な始末で、多少幹部も動搖してゐた、況や戰後の反動から擔保價格の下落となり、時價百二十七圓位までしたものが四十圓位に下落したから勢ひ閉口せざるを得なかつた、實は戰後四億五千萬圓も金が這入つてゐるので、徐ろ財界を樂視して少しも賣らなかつたが大々的思惑違ゐであつた。

◎日露戰爭後には前の經驗があつた爲に寧ろ悲觀してゐた、償金を取つた時ですらあんな風であつたから、一文も其れが取れない經濟界は定めてまづいと見て取り、諸株暴騰機會に其れを賣り除いて幸に失敗を免れた。

◎二十九年の頃甲州人が東京電燈株を買占めたと云ふのが今では評判に爲つて居る、併し其れは買占めと云ふよりも寧ろ買防ぎをしたのである、東京電燈は市の專占事業なるがゆへに、將來の好望疑ふべくもない、一つ田地でも買ふつもりで買つた見ようと云ふ相談が起り、大いに面白いと云ふので同志二十五人共同で買ふことにした、其以前から私は多少此株を持つてゐたが、扨相談の結果一口を五百株と決め、分に應じて幾口でも負擔すべき約束の下に、仲間の加賀見某をして之が買入の衝に當らしめたのである。

◎然るに其加賀美某は、共同者より何千株と云ふ買方を賴まれてゐるから、確的に買手のあるのは判り切つて居る、値の上るのも判つてゐる、其間多少の儲けをしやうと云ふので自分だけの思惑を遣り、値の上つた頃に共同者の分を買つて居た、是に於て共同者全體が其高いものを背負ひ込まざるべからざる塲合と爲り、若し之を引取らなければ相塲は下る、當然追敷は取られるに一決し、引取は引取つたが、何でも一牧の株が百七圓位に當り、當時何れの銀行へ持つて行つても買ふたときの値より四十圓五十圓と云ふ差がある、結局之が爲め一人前五萬圓位の損失を招いたと思ふ。

◎三十四年頃石油に關して一つ口惜しことがあつた、其時或る知己の醫者が石油會社を越後へ建てるつもりだから發起人になつて吳れ、又創立委員長に

なつて吳れと云ふので其れを承諾した、偖愈々成立と云ふ塲合に、梅津と云ふ人が、所有の石油鑛區四五ヶ所進上するから之を持つて會社へ這入つて吳れと云ひ、同時に二百株だけ報酬として差上げるから社長となつて貰ひたいと云ふのであつた、此時私は不圖變な感じがした、苟も二百株と云へば五十圓券にしても一萬圓、四分の一拂込でも二千五百圓である、其れを働きもせぬものに只吳れるとは變だ、何か此間に不正なことでもあるだらうと早合點して躊躇した、而して其極斷然之を拒然して絶緣した、然るに其實何等不正の跡もなく、而かも其後一年經つか經たぬに、各石油鑛區は凄まじき勢を以て價格の劇騰を示し、右の梅津其人も長く持餘し居れる鑛區を寶田石油會社に賣却して一擧十餘萬圓を贏ち得たらしい、敢て失敗と云ふではなけれど、勘違ひして儲け損ねたことを序でにお話して置く。

松澤與七氏

老將軍として東京米穀市場に持て囃され、一昨年最後の一大苦戰を爲しつゝ例の剛情を立て通し、漸くに危殆の境を切り抜けて昨年東京を去りし松澤翁は、今や故郷なる尾張西春日井郡に隱退しつゝあり、老軀尙健、而してチヤンと松澤式儀容を整へ、端然默然として中ち實に大豪の氣を具へて居る、若し翁の失敗談を數へ立つれば日も猶ほ足らざるべし、唯だ爰に顯著なる一二の話緒を錄するだけに止めやう。

◎明治十三年に東京米穀市場で拾萬圓計り儲け、一タピ故郷へ錦を飾つた所で、名古屋米穀取引所の理事に選ばれ、しぶ〳〵其職に就たが、扨て這入つて見れば好きな道とてツイ又相場を始める氣になり、其れから名古屋人阪の間で摺つたり儲けたりして、結局再び東京に出て、爾來大波小浪の打ち通しとも云ふべき有樣、最近の大失敗は明治三十二年の賣であつた。

◎忘れて忘られぬ三十二年の大失敗、彼の時は井野だの桑名筋だのと聯合し賣つて〳〵秋の大上げに引かゝつた、豐年尻で底入れの揚句が凶作と一變した上げたから堪らぬ、何程賣つても下らない、賣れば賣る程煽られるので必死の戰ひをやつて退けた、八圓臺から十三圓迄も引張り上げられたのだもの大概の苦心では無かつた、此時には大々的失敗に了つた、無理に正米を買つて渡したが大損も大損話しにならぬ始末さ。

◎處が翌三十三年の春に繼續して賣つたので漸く少々取り返したのだが、茲に又一大失敗はと、云ふと、二月末から利喰して三月はドデン買で大ひに買つた、儘か十二圓摑みであつた、其れから六月へ掛けて買つた處が、大下げを喰つて八月限で山大即ち矢處分と云ふ大事件を惹起した、處分を喰つた時は、安直で秋へ掛けて往來して居たのであるが、前年賣で懲りたから何とな く買たくもあり買で處分迄も喰つたと云ふので、何ふしても取り返しを付けねばならぬ場合であつた。

◎其れから三十四年に掛け、買ひで儲けは儲けたものゝ大玉を仕馴れてから小石數を搖つて居ると云ふ事が出來ぬ、何時も大戰をやる、大戰するに付ては、勢ひ大きな所へ着眼して割の好い處をと云ふ風に注意した。以後一勝一敗、彼の三十五年に石藏の向ふを張つて賣つた時もモウ少しと云ふ所で失敗した、龜田が俺の事を相場道の馬鹿だと云つた事があつたが全く其れに違ひないが、併し又一方に凝り固まる事も必要である、電光主義は俺が本領でない。

◎一昨年の暮の商ひでも隨分苦戰をやつた、井野が討死したので片腕もがれ

た氣も仕たが、最後の決心は何時でも本の通り裸百貫で東京へ出た時の事を思つて度胸を据えるのだ、聊か成功したから此糞度胸も光る譯だが失敗に終つたら、徐り感心も出來まい、モー年が寄つて昔しの事は詳しく覺えて居ないが、俺よりも寧ろ他人が多く知つて居るかも知れない。

賀田金三郎氏

氏の儲け力は通常人の能く得て學ぶ所でない、氏は日清戰爭後に於る金權黨の一人である、御用商人中の利きものと稱された一人であつたのだ、臺灣の西北端に大開墾を企てし着眼點は、あぶない商賣よりも寧ろ大々的地主たらんとする目的にてはなかりし乎、氏は全く國家的觀念の發動に起因したと云つて居る、何れにしてもソレガ着々成功を奏するとともならば、洵に以て一段の慶福と云ふべしだ。

巨きな眼と太き眉の其間に、氏の力行的天稟が表現されて居る、豈啻臺灣の名物男たるに止らんやだ。

◎僕は臺灣臺東附近に二萬町歩の土地を所有して居る、それは花連港と卑南の間で、凡そ四十里に跨れる荒蕪地なりしを、明治三十二年總督府から拂下を受けたのである。

◎此の二萬町歩の土地を開拓すべく拂下て以來、既に百二十萬圓以上の資金を投じて、未だ十分一の開墾も出來て居らぬ、僕に取つては先づ以て大失敗と云はざるべからずだ。

◎そればかりでない、此の開墾に從事して居る僕の使用人が、今迄六十餘人も生蕃のために無殘の最後を遂げ、討伐隊の兵士、警官及隘勇の戰死者を算し來らば、百人以上此の開拓地の犧牲になつて居る。

◎斯く多數の生命と多額の資金とを投じて、現今僅かに二千町歩の開墾さへ覺束ない仕末である、臺灣開拓事業の如何に困難なるやは、是の一事にて想像して貰ひたい。

◎今後二百萬圓以上を投じても全部の開拓は恐らく出來まい、併し僕は中止せぬ、今後も自分の力の及ぶ限りは飽くまで目的を達するつもりである。

◎元來僕が此開拓に從事するに就て、福島縣人三百、愛媛縣人四百、土人八百、生蕃人三百を使用したのであつた、所が一番困る事は、此中ちの蕃人どもが隨時勝手に蕃地へ歸つて行く、此の歸るといふやつが、彼等の蕃社總てに様子を知られるときで、驚て不意に襲來しては危害を我が同胞の生命財産に加へる、實に始末にいかぬ。

◎僕は所有地警備の爲に、小銃三千挺と彈藥三十萬發を其筋から拂下げ、農業中にも常に小銃を擔はして居る、サレド蕃人襲來の機敏なる、此等の用意も何の役に立たない、實に歎ずべきである。

◎前に陳べたやうな困難を續けて、漸く二千町歩の開墾が出來た、其內一千町歩に米、砂糖、梁、薄荷等を作つて居る、後の一千町歩は人員不足の爲め